
爆撃淡路島

足小指 打藏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

爆撃淡路島

【Zコード】

N6182C

【作者名】

足小指 打蔵

【あらすじ】

郵便ポストから右腕が抜けなくなつた元パンクロッカー、権田原溜藏は、右耳を失つた謎の老人、楊眠眠との邂逅を経てパンク界に華々しくカムバック。だが、そのパンクはいつしか日本全体を滑稽の渦中に巻き込み、不条理のどん底へと叩き落とすのだった。押し寄せる群衆。狂乱のオステージ、オフステージ。街は燃えている。そして、楊が仕掛けた罠からの逃亡を図る溜藏がついに選んだ最終手段とは・・・

零（前書き）

当小説にはブラックジョーク、毒舌めいた表現が時折出てまいります。よつて、読む人によつては心象を害される場合が有るかも知れませんが、作者の本意は特定の個人、団体、職業、人種、思想などを中傷する事なく、飽くまでストーリーの一環として上記の表現を採用するものですので、何卒ご理解賜りたくお願い致します。

郵便ポストから右腕が抜けなくなり、いつたいどれだけの年月が経つたのだろうか？

彼、権田原溜藏は帝都下に於ける条虫区談合町の路上で今日も一人途方に暮れていた。

なにせ、このたつた縦三センチ、横十七センチの定型ハガキ投入口に右肘の関節までもがぎつぽりと嵌つてしまつているだけに事態は相当深刻と言える。そんな彼に対する通行人の視線は冷たい、若しくは、畸形の者に向けられるそれである。が、そんな視線にも彼は今やすっかり馴れてしまつていた。

どうしてこんな事になつてしまつたのだろうか？それがどうにも思い出せない。

とある夜に溜藏はこの界隈でベロベロに酔つ払い、路傍に転倒するなどしてそのまま記憶を無くしてしまつたのだった。別段、そのこと自体は彼のようなアル中にしてみれば何ら珍しい事でもなく、言うなれば雨に降られるのと大して変わらぬぐらゐの日常的な些事である。

しかしその朝、気が付けばこの場所でこのよつた有様と成り果てていた。誰かと喧嘩でもしたのか？それとも、ただもうわけも分からず自分自身で右腕をポストに捩じ込んだのか？当然の事ながら、このよつた事態となつた当初は大騒ぎだった。官憲から消防局のレスキューから、拳句の果てには自衛軍までもが溜藏を救出せんと大挙して出動してきた。無論、大勢のマスコミも詰め掛けるところとな

り、テレビ皇国などはただそれだけの事で、溜藏本人が見る事はもちらん叶わなかつたのだが、二時間の特番を組んだというのだから随分と馬鹿げた話ではある。

が、結局、溜藏が助けられる事はなかつた。

問題の郵便ポストは今時珍しい円柱型の頑丈な鋳鉄製のものであり、鋳鉄の外皮の肉厚は極めて厚い。故に、ハガキ投入口周辺のみを焼き切る、などといった生半可な方法は全く通用せず、そうなると、状況が状況だけに溜藏を救出する方法としてはあと一つ、郵便ポストそのものをぶち壊すか、或いは溜藏の右腕を切断してしまつか、という最終的且つ究極的な手段しか残されなかつた。そしてそんな状況が判然とするや、溜藏を救出しようとする周囲のそれまでの気勢は目に見えてたちどころに萎えてゆくところとなり、今に至つては、その救出策について云々する者すら誰一人としていなくなつていたのだ。

そこへ現れたのは条虫区役所の大杉福利厚生担当部長五十四歳。或る時、この役人は溜藏のところをふいと訪ね、あらうことか今後の生活支援を交換条件として右腕切断案の採用を溜藏に迫つたのだった。しかるにその提案たるや、右腕がポストから抜けなくなつて困つている善良な区民を何とかして助けてあげよう、との公僕として本来持つべき崇高な滅私奉公的善意からのものでは決してなく、寧ろ、どこの馬の骨か知らぬが郵便ポストに腕なんかを突つ込みやがつて迷惑千万、そんな馬鹿者の右腕などは切り落とそうがどうしようが一向に構わぬのだから面倒な問題はさつさと片付けてしまおう、といった横柄極まりないやつつけ仕事的発想からのものに違ひなくて、それが証拠に、この時の大杉の溜藏に対する態度ときたら實にふてぶてしく、憎憎しく、傲岸不遜に過ぎ、よつてそれは溜藏の即座に拒否するところとなつたのである。

「何人たちとも俺を不具者にする権利などはない。それに俺は一応
条虫区民だ。区民の幸福を守るためにならポストの一つや二つぐらい
ぶつこわすのが公僕としての本然ではないのか？顔を洗つて出直し
てこい」

溜藏がそう答えるや、大杉は、それではポストぶち壊し案について
鋭意検討するから少し時間をくれ、但しポストを壊すとなると代替
ポストの設置等も必要となり、すぐには予算が下りないかも知れな
いよ、などと捨て台詞を残し、その場を去つていった。

そして、それつきりだ。

結局、あの年度の予算には通らなかつたのか？しかし一説には、再
来年にこの界限の区画整理が予定されており、その時にどうせこの
ポストも取り壊すのだから、それまであんな馬鹿は放つておこう、
とこう結論に至つたとの噂もあり、真偽は未だ不明のままである。
なめてるのか。

一（前書き）

当小説にはブラックジョーク、毒舌めいた表現が時折出てまいります。よつて、読む人によつては心象を害される場合が有るかも知れませんが、作者の本意は特定の個人、団体、職業、人種、思想などを中傷する事なく、飽くまでストーリーの一環として上記の表現を採用するものですので、何卒ご理解賜りたくお願い致します。

しとしと全くもつて人を小馬鹿にしたような陰鬱極まりない霧雨降りやがる水無月の或る日、溜藏の前に一人の老人が黙して立つていた。

年齢は九十ぐらいであろうか？相当の高齢に見える。かつての戦争ででも失ったのか、右耳がない。左目の上瞼は、それが積年抱え続けて来た地球の重力に抗うのをもはや完全に諦めきつたが如く重々しく垂れ下がつている。恐らく、その様子では左目の視力は殆ど失われている事であろう。顔面の表皮からは水分はたまた脂分といった養分が既に徹底的に失われ、ありとあらゆる代謝が停止し、その細胞を構成する分子はとうの昔に死に果てて本来の機能を全くのところ放棄してしまつていてなお、そこに執拗にもまるでスラッジのよう堆積沈殿し続けているが如き荒涼たる様相を呈していた。しかもに、よくよく我が身の上と比較するにつけ、この老人の老いつぶりは決して憐れむべき類の対象ではないであろう、などと溜藏はほんやりと思う。

形有る物、この世界に存在する限り、経年変化は例外無く免れられない。木は朽ち、鉄は錆び、そして生き物は老い、死ぬる。この老人に訪れた老いは等しく万人にも訪れるものだ。更に突き詰めて考えれば、この老人の右耳がすつかり失われてしまつてているという痛々しい有様さえ、先に察したが如く、それが時の戦乱に於いて負つた名誉の負傷であるとするならば、それは悲しくも一時代の必然であつて、強ち不自然な畸形とは云い切れぬのであつた。仮にその失つたものが片目であるうと片腕であるうと片脚であるうと片金玉であろうと、だ。

反して、溜藏の今置かれている状況はどうか？郵便ポストのハガキ投入口から右腕が抜けなくなってしまっているというこの状況は？これほど不自然なものはない。これを畸形と云わざしてなんとする？右腕の付け根までずつぼしと嵌っちゃっているのだ。ポストに。

肘の関節部分の断面積がハガキ投入口の面積に比して絶対的に大きいが故に、それが障害となつて右腕をハガキ投入口から引き抜く事が出来ない、という物理的事象はどんな阿呆でも分かる。しかし、それでは何故、ハガキ投入口に、それに比して断面積が絶対的に大きい筈の肘の関節部分を経て付け根部分までも右腕をしつかりとインサートし得たか？という疑問に至つては、如何な科学的検証を以つてしまつても絶対に解明出来るものではない。それは「謎」などと言つてしまえば格好もよいが、極めて無意味な謎である。そしてその無意味さは、老人を見舞つたところの必然とは正に対極を為す……。そんな取り留めのない思慮に耽るにつけ、溜藏は再び己を見舞つた不幸、その不幸の無意味さを憂い、一人嘆息するのであつた。

そこへ老人は、口を開く。

II (前書き)

当小説にはブラックジョーク、毒舌めいた表現が時折出てまいります。よつて、読む人によつては心象を害される場合が有るかも知れませんが、作者の本意は特定の個人、団体、職業、人種、思想などを中傷する事なく、飽くまでストーリーの一環として上記の表現を採用するものですので、何卒ご理解賜りたくお願い致します。

「中外画句末魚無部羅於、紗佛殺混交肴美味善無善好好抹殺餃子、印西梵天無駄脂肪燃」

さて、このように老人より話しがけられた瞬間、溜藏は「またか」と思った。辟易した。

わが国が先の大戦に敗北を喫して以来、外来人種が取り分け多く流入し、現代でも依然として多く往来するところのここ談合町に於いて、通りすがりの外来人から右のよつた何語だかさつぱり分からぬ言語でもつて話しがけられる、といつて事自体は別段特殊な体験でもなんでもなく、かてて加えて斯様なる珍奇な状況に置かれた溜藏のよつた人物に興味をもつて話しがけてくる輩、ときたら、寧ろ専らこういった外来人ばかりに限られた。ところが問題なのは彼ら彼女ら独特の物見高さ、無遠慮さである。風俗、習慣の違いからなのか？それは我々日本人にとつて掛け値なしに鬱陶しく（例えば彼ら彼女らは、遠巻きに遠慮がちにその光景をちらと横目に見てはそそくさと去つてゆく奥床しい日本人達をよそに堂々とポストを取り囲み、溜藏にはさつぱり理解出来ぬところの言語でもつてさんざめき、あまつさえへらへらと笑いながら溜藏の肩をぽんぽんと気安く叩き、彼に対して訳の分からぬ事を楽しげに捲し立て、そうして溜藏が何ら答えられないでいるのを見て取るや指差し「ひょーつほつほつ」なんて笑い、しまいには笑い涙を流し流し仲間と阿呆のように抱き合つたのだった）、それ故、その言語の分からなさと相俟つて、溜藏はいつも彼ら彼女らには苛々とさせられていたのだ。そこで、こういった手合いに対する溜藏の対処は、いつしか次のような怒号を以つて為されるところとなつた。無論、全文日本語である。

「だまれ！貴様！ここをどこだと心得る！日本国だ！皇国だ！この国にいる黄色い色の人間は九割方が日本人と決まつてんだよ！日本では日本語を喋りやがれ！ここは大陸みたいに甘くねえ！单一民族国家、島国だ！日本語を喋らねえ奴は人間じゃねえんだよ！甘つたれんな！てめえの国と戦争起こすぞ！」

その台詞とて一字一句、今や完全にパターン化していたものの、大抵の外来人はこれだけで田を白黒させ、こりや狂人だ、かかわらぬほうが良いと退散する。ここでは何よりも日本語、というところがポイントである。そりやそうだろう。なに人であろうとかに人であろうと、人間という生き物は基本的に自分の分からぬ言語で無茶苦茶に怒られる、という事に対して本能的な恐怖を抱くものなのだから。

ところがこの時、老人には定石が通用しなかつた。溜藏の罵声を受け、老人の口から平然と発せられたのは意外にも流暢な日本語。

「なんだ、広東語も分からんのか。無学な若造じやな」

「無学つて・・・なんだよ。日本語喋れるんじやねえか」

「ふん、少なくともお前なんかよりは上手く喋れるぞ」

ふてぶてしいじじいである。しかし溜藏、ついぞ先ほど存分に怒鳴り散らした手前もあって、しばらく虚勢を張り続けるより他はない。

「ふうん。ま、上手いのは結構なんだけど、で、じいさん一体何者なんだよ？何だつて俺なんかに話し掛ける？さつさと用件をぬかせ。俺は見てのとおりの有様だ。道でも聞きたいのなら、分かる範囲でなら教えてやろう。それとも、俺のこの有様を見て興味本位で近づいて来ただけなら、予めあんたの知りたいであろう事を教えと

いてやるよ。何故こうなったか？それは俺にも分からん。俺が答えられるのはそれだけだ。さあ、用件は何だ？後者ならば、これ以上話す事は何もない。眺めるだけ眺めて、気が済んだりとつと失せろ」

「・・・まあそういう立つな若造。ワシの用件はそのどちらでもない。儲け話だ。ワシはお前を使って金を儲けたいのだ。勿論、お前にも儲けさせてやる。悪い話ではない。ワシが何者なのか？何故にお前に近づいて来たか？これからそいつをじっくりと教えてやるから黙つて聞きなさい。それと、せいぜい口の利き方には気を付ける事だな。場合によつては、お前の命を奪つなど、造作もない事だ」

果たして老人の説明とは「うだ。彼の名は揚眠眠。やんみんみんと読む。広東人。幼少の頃、大戦直後のドサクサに紛れて一族郎党で不法に来日。その後、談合町で成長し、二十歳の頃にGSバンドを結成。メジャー・デビューするも、GSは本来の嗜好に非ず、ふとした諍いからバンドリーダーを殺害。当然ながら、十年近く臭い飯を喰らうハメになる。出所後、今度は日本では初となるパンクバンドを結成してカムバツク。屠殺社とレコード契約を結ぶが、歌詞のあまりの過激さに一瞬で契約破棄。続いて狗肉蓄音機産業と契約するも、はたまた出演したテレビ番組で放送禁止用語を連発したばかりにわずか一ヶ月で契約破棄。その間にもベーシストをクビにし、その替わりにベースが全く弾けないベーシストを加入させ（しかし、この前任ベーシストは後のレコーディングで替え玉ベーシストとして活躍）、遂に骨粉レーベル社からたつた一枚のアルバムをリリース……の直後にバンド解散。バンドの新任ベーシストは恋人を殺害した後、自らもオーバードーズ死。揚は「うど、同様にマネージャーを殺害。逃亡。そして、以降はチャイニーズマフィアの裏社会でのし上がつてゆき、現在に至っている。とまあ、一部だからで聞いたような話であるのに加え、どこまで本当なのかよく分からぬような経歴だが、とまれ、そんな経歴を持つ揚が今、何故に裏社会などとは全然関係のない溜藏に近づいて来たのか？」といふと、表面上は音楽業界から足を洗つたように見せた揚だったが、実はその後、裏社会のルートを使って音楽業界の要人を片つ端から買収もしくは恐喝もしくは誘拐もしくは強姦もしくは殺害、俄かには信じられない事だが、そのようにして現在では音楽業界をも事実上手中に収めているのであり、そこで溜藏をパンクシンガーとして売り出したいというのだった。何しろ組織が背後に付いているのだから大ヒットは間違いないと。では、なぜ溜藏なのか？と尋ねねば、以前

に揚は溜蔵のステージを偶然に観た事があり、そのパンクつぱりにいたく感銘を受けたからなのだという。

「まさか……じっちゃん。あの頃のライブを見てたのかよ？」

以前のステージ・・・・。そう言われてみれば、溜藏とて心当たりが全くないわけではない。

今から十年ほど前だつたか？極めて短期間ではあつたが、談合町内のスラムに「ゴミ溜めの如く沈澱していた屑のよくな連中によつて結成された「野垂れ死にアワビ」なるパンクバンドに参加、愚にもつかぬライブ活動を展開していた時期が溜藏にも確かに有つた。

もつともその活動内容たるや、無頼の極みである。何がそんなに憎かつたか？観客、共演バンド、ライブハウスのスタッフ等等との殴り合いなどは常日頃で、故にバンドメンバーの誰かが体のどこかを常に骨折しているような有様であつた。そうしてステージ上に於いては楽器、機材のことごとくを破壊し、燃やした。脱糞し、それを自らの全裸の体に塗りたくつては客席へ突入した。ガスコンロを持ち込み、餓餉を茹でた。天麸羅を揚げた。九条葱を刻んだ。天麸羅餓餉は一杯四百円。野球もした。時にはペンキを持参し、ステージ上の全体を抹茶色に塗り尽くしあえもした。

そしてとどめにバンドの最後というのがこれまた酷い。溜藏本人はそんな狼藉を繰り返しながらも、しかし一方ではロマンチストといふか、ナイーブといふか、内省的といふか、冬、窓の外の落ち葉を眺めでは無性に物悲しくなり、はらはらと落涙するようなメランコリイな一面をも併せ持つていたのであって、そんな事情から、或る神無月の下旬、止むに止まれぬセンチメンタルな感情に突き動かされ、「ふい」と半ば失踪するようにして衝動的に裏山へ籠もつたのだった。裏山の紅葉は見るに鮮やか。溜藏は誰も入つて来ない雑木林にテントを張り、そこでちゅんちゅら小鳥などと戯れては十日間

程を過ごした。それはそれは素晴らしい体験であつて、また来よう、などと彼は思ったものである。ところが下山した後、他のバンドメンバーとの連絡が急に一切取れなくなってしまったのだ。蓋し、溜藏はいくつかの予定されていたライブを結果として予告なしにサポートージュしたわけで、さすがにこれには人間の屑のような奴らも立腹したのだろうか?と、溜藏は気掛かりとなつた。そこで周囲の人間に彼らの消息を聞いて回つた。結果、ギターリストが謎の焼殺体となつて発見された事実、ベーシストはやくざの情婦に手を出して湾に沈められていた事実、あまつさえドラマときたらエンジエルダストをキメてヌンチャク振り回しハッテン場へと殴り込み、爾來行方が知れぬままとなつている事実を遂に知つたのである。

そういうた過去の陰惨さもむし」とながら、ある日突如として溜藏の目の前に現れた揚眠眼なる広東人の、あたかも零から巨万の利益を作り上げるが如き荒唐無稽たる提案を溜藏が率直に受け止めた筈は無い。その内容は、通念からすれば戯言、若しくはいかがわしい甘言と受け止めるに余り有る。

しかるに、仮に今、この老人の甘言に騙されたとして、今の溜藏に何の失う物が有るというのか？ 総じて、騙されて困るのは、騙される事により何らかを失う人間である。数年来郵便ポストに右腕を突っ込んだままの彼に限り、そのような類の人間に非ざる事は想像に難くない。

そこで溜藏は、ともすれば哄笑にも近いような嘲り笑いを続ける深層の己を巧妙に裏切り、そうしてその表層に於いて、實に狡猾な演技を以つてして楊に対する卑屈な従順の態度を見せてやる事としたのだった。些か芝居がかつた快活さをも垣間見せ、使い方すらも忘れた、忘れたが故に幾分いやらしく聞こえもする丁寧言葉すらも駆使して。何故そうしたか？ それは、もしも真に楊が溜藏を騙そうとしているのなら、これは願つてもない暇潰しになるかも知らぬと思付いたからである。何しろこちらはノーリスク。楊がいくら溜藏を騙しても、それはどこまで行つても児戯、詐欺ゲームの域を絶対に逸脱し得なのだ。

実のところ、溜藏の日々は斯様に退屈そのものであった。楊の詐欺ゲームに喜んで付き合いたくなるほど暇であった。泣きたくなるほど閑居していた。郵便ポストに囚われて、どこにも行けねえし。

翌朝、見た事もないような夥しいレコードイング機材が溜藏の前に並べられた。機材から発せられるゴム、樹脂等の新鮮な匂いから、それらの機材が何れも新品、つまり、最新鋭のものであらう事が素人の溜藏にも想像された。

そして三十人は下らないであろうスタッフ。彼らはただの一人として全く無駄を生ずることなく、居並んだ新鋭の機材を前に、己が与えられた準備作業分担任務役割を淡々と且つ整然とこなしており、その澁みなき様が、彼らがいずれもその道に於いて相当に熟達したプロフェッショナルである事を無言の内に表していたのである。あたかも宇宙船の操縦席の如き複雑怪奇なコンソールを前にヘッドフォンを装着し、一体何の意味が有つてそれほど沢山並んでいるのやらさっぱり分からぬツマミ類及びスイッチ類及びボタン類を一つ一つこねくりまわしている者、何百本あるのやら数える氣すらも起立てる者、意味不明なハンダ付けをする者、後にやつてくるであろう演奏者連中がよほど大物なのか、あらかじめギター、ベースをケースから取り出し、莫迦丁寧に磨いた後、弦を張り、チューニングをしている者までいる。彼ら自身が演奏者でない事は、チューニング途上に於いて調弦が正しく為されているかどうかの確認音出しをする折の右手のピッキングのたどたどしさ、弦を押さえる左手の指のたどたどしさを見れば一目瞭然であった。彼らの専門は楽器の演奏ではないのだ。もつとも、以前に溜藏が演奏していた類の音楽に於いては、その程度の技量しか持ち合わせていない演奏者が居たとしても全く不自然ではなく、現にそうした演奏者が嘗て自分の周りにそれこそ当たり前のようになに数多く存在していたのだが。

そういうえば、これらの機材とスタッフとを手配した張本人であろう楊はどこにいるのか？楊は確かに昨日、あくる日、つまり今日から早速レコーディングを始めようと言い残し、溜藏の前から姿を消した。その際に於いても溜藏はどうせ嘘八百であろうと内心取り合はず、いい加減な生返事を返したまでである。しかしその嘘八百は今や現実となりつつある。いくら騙されても失うものがないといえ、これだけ無闇に急速にやたらにスケールがでかくなつてくると、少し薄気味悪くも感じるのが人情というもの。以前に溜藏のステージをたまたま観てパフォーマンスが気に入つたからといって、それだけで一日に数百万円のコストが掛かるや知らぬ前述の機材、スタッフを急に何となく思いついたように都合する、というのはやはり何をどう考えても正常な人間の判断であるとは考えにくい。なんとなれば、自分がそのようなパンクシーンで活躍していたのは十年以上も前の事であるし、極めてアンダーグラウンドなシーンであつたし、そもそもそのシーンに於いてでさえ自分が他人よりも抜きん出た人気を誇っていたわけでもなかつたのは、溜藏自身も認めるところであつたのだから・・・・・思うに、野垂れ死にアワビは万人から歓迎される類のバンドでは決してなかつた。それよりもライブ中に機材を破壊された、ライブ中の殴り合いによつて大なり小なり怪我を負わされた、或いはバンドメンバーがステージ上で脱した人糞が衣服若しくは人体に付着した、ベーシストに情婦を寝盗られた、ハーテン場で戯れていたところにドラマが殴りこんできた、等等の様々な理由でもつて彼らを激しく憎悪する人間の方が遙かに多かつた筈である。

二時間後、溜藏はレコーディングの渦中に有つた。録音の作業は基本的に、というか全面的に、演奏者が一斉に演奏して同時に溜藏も歌い、曲の最初から最後までを一気に録音してしまつ、いわゆる一発録りの手法でもつて次から次へと行われた。それが可能であつたのは、溜藏の提起する曲の全てが例外なく「ことじのコードをひた

すら繰り返すだけ」というような極めて原始的な構成を有しており、かといってその代わりに米国の黒人種の如くファンキー或いはダンサブルなリズムとかを前面に打ち出しているのか? というと全くそんな事もなく、ギターはただ音が歪んでうるさいだけ、ドラムは何となくドンドン鳴っているだけ、ベースに至っては弾いてるんだか弾いてないんだか見当すらつかず、肝心の溜藏のボーカルはというと、「汗ダラダラで三日月に向かって、ぶツ殺してやると書いた旗振り回して疲労困憊」などと唾棄すべきようなたわけた歌詞をメロディーを付することなく絶叫しているだけ、といった体たらくでつたからであり、その一方で実のところ、この日のレコーディングに呼ばれた演奏者というのは、いずれもレコードイングだからこそいいようなものの、こんな音楽をライブだとなんとかで一般聴衆の前で演奏させられようものならば忽ち恥ずかしさのあまり人事不省にでも陥りかねないぐらいに非常に高い演奏技術と知名度とを兼ね備えた錚々たるフュージョン系の大家ばかりであったからである。そりやあ楽器のチューニング専門スタッフも付いて当たり前といふものだ。

にしても最新鋭の機材、それらを操るスタッフ、そして、ジャンル的には全く必要ないはずの高名なミュージシャン・・・・返す返す、楊は一体何を考えているのか? 実際のところ、一体いくらばかりの力ネを積んだのであるうか? 宝の持ち腐れとは正にこの事を云う。力ネをドブに捨てるとは正にこの事を云う。しかし見方を転じるに、その投資の刹那さ、ある種の投げやりさ、打算のなさは、どこをどう切り取ってもパンク以外のなにものでもない。とすれば、楊は真にパンクなのか?

その楊はこの日、とうとう最後まで現れなかつた。

さて、このようにしてわずか一日で製作された溜藏のファーストアルバム、「爆撃淡路島」は瞬く間に売れに売れ、あらうことか発表後一ヶ月を待たずして一億枚の売上を記録するに至った。

この時点に於いて本アルバムはまだ海外には発表されておらず、従つて、一億枚のセールスという事はつまり、日本国内に於いて一家に一枚どころか一人にほぼ一枚の割合でもって広く国民に所有されるところとなつた事を意味する。その一億人の中には当然ながらアルバムを買う経済力を未だ有せぬ学童や、そもそもアルバムを買うや買わざるやの判断すらおぼつかぬ乳幼児などもいたわけで、そのような若年者に対しては、将来わが子が成長成人してしかるべき集団社会に所属した暁、爆撃淡路島を所有していなればかりに周囲から村八分の扱いを受け、ダサい奴、暗い奴、虚け者、偏屈、非国民、蛇蝎などと後ろ指を指され、その誹謗中傷、迫害から逃れんとする内に何をどう間違つたか魂の救済などを求めてインドへ渡航、ガンジヤまみれ、行方不明、半年後、ガンガーの聖なる流れに人知れず死体を浮かべて無縁仏、などというような羽目に陥つてはたまらぬと、いかんせん明日からの光熱費、水道代に窮する慢性的な生活不安は些かも拭いきれないものがあるけれど、大死一番、一枚三千円ぐらゐの我が子への投資を惜しんでいる場合ではないと、両親が一枚をはたいて買い与えたに違ひないのであつた。

しかしながらこの間、言つてみれば当然のことではあるが、溜藏とて何もせずに指をくわえ、茶の湯を立てなどし、ただひたすら白痴の如くうすらぼんやりとアルバムが勝手に売れでゆく趨勢を眺めていたのでは決してない。実際、この一ヶ月間というものの、溜藏はありとあらゆるメディアに露出していたのである。否、正確に申し上

げるならば、これも恐らくは楊の仕組んだ謀略であらうからして、露出「させられていた」のである。

この間、溜藏は雑誌、新聞等のインタビューをそれこそ片っ端から受けさせられ、間断なく行われる写真撮影グラビヤ撮影並びにプロモーションビデオの撮影等に応じ、離れ小島に漂着した一組のうら若き男女が土人の集落に火をつけて竹馬を奪い、その竹馬でもつて島外逃亡を企てる、といったストーリーのドラマに火事から逃げようとするが結局焼死してしまった土人役で出演し、某食品会社の即席塩ラーメンのCM出演に至つては、「栗国のクソ 塩爆発炎上、食らい食らへば死屍累々、塩塩食らえ、毒まで食らえ」などとまあ一体誰が作ったのやら、しかし溜藏が作るのとをして変わらぬような悪辣きわまりない歌詞が繰り返されるCMソングまでも歌わされたのだった。

そういうたプロモーション活動の苛烈具合といつたら寝る間もない程で、実際、溜藏はドラマの撮影途中に不眠が祟つて約十回、気を失つた。その度にスタッフから氷の入つた水をぶつかけられ、目を覚まさせられた。はつきり言ってただの奴隸である。芸能奴隸。いくら力ネのためとはいえ、ここまでミユージシャンを骨の髓まで徹底的に食いもんにするとは楊、恐るべし。レコードティングの時に見られたあの大掛かりな投資をえげつなく取り戻そうとしているかのように。

それにしてもメディアの求心力とはえらいものだ。正味のところ爆撃淡路島は、その音楽的内容たるやそこらへんに横溢する凡百のガレージパンクバンドのそれと比べて大して変わらぬうなものでは決してなかつたし、そういうたバンドのアルバムと同列の扱いをしか受けていなかつたらば、マニアなどと称する余程の物好き連中は別として、恐らくは誰も鼻に掛けなかつた筈の代物であつた。しかる

に、こうした不眠不休のメディア露出の甲斐あって、結果的にはマニアどころか、およそパンクなどとは縁のない普通の人生を歩んでいる世の衆人　彼らがまともにその音楽を聴いているなどとは到底思えなかつたが　すらも広くこの腐れアルバムを求めるところとなつてしまつたのだから、いやはや、マインドコントロールである。

月日が経つのは早い。

更に一年が過ぎた。

溜藏はもはや押しも押されぬトップパンクスターとしての地位を確立しつつあった。

先のアルバムはその後全世界にて販売され、これまでに一体何億枚売れたのか？今や数える事すら不可能である。

揚はレコードティングの前日以来、現在に至るまで一度たりとも溜藏の前に姿を現してはいなかつたけれども、相も変わらずあの手この手を使って背後から糸を引いているには違いないようで、先のアルバム発売時に於ける狂騒的プロモーションが一段落した後、今度は間髪を入れずに大々的な興行、つまり、ライブが矢継ぎ早に企画されたのだった。

レコ発ライブの初日には全国の北端から南端、津々浦々より、凡そ八千万人のファンが殺到した。当然ながら会場に入りきれないファンは無数。すると、寄る辺ない彼らは途端に暴徒と化し、そのようにして一夜明けた会場周辺は、空襲を受けた戦時下の街の如き荒れ果てた惨状を呈したのである。

一方、その台風の日となつた溜藏はといふ、これはもう昔取つた杵柄、ステージ上では大いに暴れ、爆音に負けじと怒鳴り散らかし、観客を煽り、まあ音楽ジャンルもジャンルであるし、今となつてはステージ上で溜藏が右に申し上げたような事をしようとして観

客は関係無しに勝手に熱狂するのだろうが、熱狂の渦を作り上げたのだった。溜藏のバックを務めるメンバーは例のフュージョン演奏大家連中である。彼らは大勢の前で斯かる音楽を演奏するのがよほど恥ずかしかったのか、ギターリストはライブが開始されて二十分、ドライマーは二十五分、ベーシストはおよそ三十五分が経過した時点でそれぞれぶつぶつうつうつうなどと奇声を発し、しかるのち人事不省に陥った。溜藏はしようがねえってんで観客として来ていたそこいらの女の子に適当に楽器を持たせ、ステージに立たせた。それで全く問題は無かつた。やがて、この醉狂な饗宴に或る種の宗教的陶酔を得たのであるうか？全裸となつた男といわす女といわす数十人の若者がステージに勝手に上がり、さのよいよと踊り狂い、しまいには自慰もしくは交接を始めた。さほど間を置かずして、今度は客席に於いても交接が始まつた。こうなれば、もはやライブなどと呼ぶべきものではなく、いわば極めて規模を大にする公然の変態色情乱交パーティーである。人肉の大罪。サバト。神よ赦したまえ。狂乱という言葉以外、もはや何も思い浮かばぬ狂乱。狂乱といえば、オンラインステージも狂乱であつたがオフステージも狂乱であつた。ライブ終了後の溜藏の周囲には一体誰が用意したのやら、何をどうやっても絶対に消費しきれぬであろう夥しい量の食物、酒、薬物、そしてグルーピーが供せられ、溜藏は食物と酒と薬物を思うさま摑取し、女子のグルーピーはとすると溜藏の下腹部に跨り、すなわち腰を振つたのだ。それに飽きたると溜藏は、今度はグルーピー数人に命じて下半身の着衣を脱がせたるままに四つん這いの姿勢を取らせ、しかるのちに尻の肛門部分にロケット花火を挿入し、此れに点火して発射。飛距離約二十五メートルを記録。この一年間、このようにしてほぼ毎日のように挙行されたライブ会場並びにその周辺の惨状たるや、常に筆舌に及くし難いものがあつたわけだが、楊の組織との癒着でもあるのだろうか？国家権力によるライブの強制中止、などといった実力行使措置はついぞ行われる気配すら皆無のままであつた。

しかし現金なものである。隣の芝生は常に青い。人間というのは自分が人から見向きもされない時には目立ちたいと思い、目立て目立つてしうがない時には気詰まりでしうがないものだから人目から逃れたいなどと思う、要するに全く正反対の境遇を望む因果な生き物なのであって、このところ溜藏も後者の例に漏れず、人目から逃れ、誰とも会うことなく浜辺で一人夕日などを眺めつつ潮風に吹かれ、そうしてひらひらと舞を舞つたりしたいなどと望むようになっていた。

今や、嘗ての退屈が懐かしかった。大勢から注目されるという事は決して楽しいばかりではない。この一年というものの、有名税ではなにけれども溜藏が人目にさらされぬ時間などは殆どなく、常にその動向を注目され、注目されるだけでなく、グルーピー、リサイタル関係者、プロデューサー、アレンジャー、マネージャー、記者、観客、テレビ関係者、仕出し弁当屋、僧侶など様々な種類の人間が絶えず入れ代わり立ち代わり何らかの用事を以つて溜藏に接してきたわけで、溜藏はすべからくそれらの人間に対して立場的には絶対的に上なのであつたけれども、まあそれでも赤の他人と接触折衝するというのはやはり大なり小なり神経が磨り減るものであつて、その点は溜藏もタダの人、楽しい時は笑い、辛いときは人並みに泣いてしかるべきものであつたのだ。

ところが、通常の芸能人であれば、なんであれば突如記者会見などを開き、私は明日から芸能活動を一切停止します、芸能界に疲れました、絵描きに転身します、なので私をどうか探さないで下さい、かしこ、などと発表でもせんものなら、周囲のゴタゴタはそれなりに暫くあらうけれども、我が身をそこから隠匿隠蔽するにつけて、いつしかは衆目衆聞から遁れるに至り、そうして後に入里離れた山中に庵をかまえ、森羅万象に心遊ばせるまま孤独を楽しみ風流三昧、

なんてな理想的な余生の展開をひょっとかすれば期待出来るやも知れなかつたが、溜藏に限り、縦しんば今、そのような停止宣言会見を開いたとして、そとは簡単に問屋が卸さぬであろう事が容易に想像された。

何故つて？

この期に及んで、溜藏は未だ右腕を郵便ポストに突っ込んだままの状態にあつたからである。

何の事はない。溜藏は今まで右腕を郵便ポストに突っ込んだまま、レコードティング、プロモーション、ライブ……ありとあらゆる活動を展開していたのだ。

例えばレコードティングなどは、郵便ポストの周りに簡素なレコードティングブースが一夜漬けで設営され、そこへ機材を持ち込む事によって行われた。ライブはとくに、これはもうアマチュアミュージシャンが勝手気ままに行うところの路上ライブに毛を生やしたようなもので、郵便ポストの周囲に急拵えで組み上げられたハリボテの野外ステージでもつて行われたのであった。その際、その一帯の交通は一時的にシャットアウトされ、そのシャットアウトされた区画が一応のリサイタル会場とはなつたものの、そもそも溜藏のポストがある通りというのは帝都環状線沿いの裏通りで、線路に肉薄したその裏通りの道路幅といつたらせいぜいが十五メートル程度。そんな場所に急造した会場のキャパなどは高が知れている。何をどう頑張つても一度の収容人数は百~百五十人ぐらいが関の山といったところで、それに納得がゆかぬのは溜藏を一目でもいいから見ようと全国津々浦々より一族郎党でもつて押しかけてきた他ならぬファン達であった。彼ら彼女らがこの体たらくに腹を立て、といつても別に誰が悪いというわけでもないのだが、それだけに却つて彼らの怒りのやり場はなくなり、遂にはそのどうしようもない怒りに身を任せるまま暴徒と化す、といつてもまあ、無理のないっちゃあ無理のない話。とまれ、このように右腕をポストに突っ込んだままの状態とあつては、仮に記者会見を開いて休業宣言を行つたとして、次の瞬間から当然見舞われるであろう「マスコミ」、若しくはファンからの執拗な追及……こういったものからは到底逃げられないわけで、結局のところは多勢に無勢、やがては溜藏の方が根負けし、休業宣言

撤回、などという碌でもないシナリオが想像されるばかりであった。

ところがある時、溜蔵は単純な計算をやつてみた。結果、彼は「『逃げられない』などとは言つていられない。何としても逃げねばならぬ」との強力な衝動のままに、万難を排しても自身が何らかの行動を起こさざるを得ない状況にある事を知つたのである。

ところのもこうだ。今までにこなしてきたステージの回数は約三百回。一回毎の観客数は会場キャパの問題もあつて平均して百人程度と考えると、これまでの延べ観客動員数は三百回×百人＝三万人。その一方で全国から押し寄せて来ているというファンは八千万人。彼ら全員にライブを見せようと思うと、ぐわあ！あと（八千万人・三万人）÷百人＝七十九万九千七百回もやらねばならんではないか！更に、ライブは一日一回と仮定し、この回数を一年三百六十五日で割ると、小数点以下は四捨五入で一千百九十一年。何という回転の悪さであろうか。つまりこのままいけば、一生休みなしに働いたとしてもファン全員を満足させられる日はまず絶対に来ず、さりとて全員が満足せん限りは需要が絶える事は恐らくないのであつて、つまり早い話が、溜蔵はいざれにせよ一生休みなしに働かねばならんのであつた。事実、彼らの殆どは溜蔵のライブを見るまで頑として各々の郷里には帰らぬ腹のようで、今ではその大多数が帝都あるいはその近隣に住民票を移し、結果、この一帯はただでさえ過密なのに、更に凶悪に過密化、逆にそれ以外の地域は極端に過疎化、といった具合に、我が国の地域別人口バランスは今や歴史上例を見ないまでに歪な様相を呈しつつあつた。一体、行政はなにをやつているんだ？

行政で思い出した。

確か三年ぐらい前だつたか、溜藏が郵便ポストに囚われの身となつて暫くの頃、溜藏のところを一度訪れ、右腕の切断による救出策をしきりに薦めてきた男がいた。条虫区役所の大杉福利厚生担当部長五十四歳である。あれから三年が経過しているのだから五十七歳か?ま、年齢などはどうでもいい。

彼は、自分の提案した右腕切断案を溜藏から断られるや、それつくり溜藏に對しては全くの音沙汰なしを決め込んでいたのだった。しかしあの三年前の約束、忘れもしない。確か大杉は、それでは右腕切断案の代わりに郵便ポストの破壊による救出案について鋭意検討する、但し、それを実行に移すにはポスト破壊並びに代替ポスト設置の為の予算を区として確保せんければならず、斯かる予算申請にはそれ相応の時間が掛かるであろうからその点は了承しておいて欲しい、と溜藏に言い放つていたのだ。しかるにあれから三年。相応の時間たるや、いつたいどれほどの時間なのか?いくらなんでも時間が掛かり過ぎではないか?そんなわけで、溜藏は再度大杉を呼び出す事にした。いいかげんにこの状況をなんとかして欲しい。いや溜藏は全国区の有名人である。もしも条虫区役所が呼びかけに応じぬ場合、溜藏は有ること無いことを全国ネットのテレビカメラの前でさんざつぱら喋つてやるつもりでいた。さすがにそれを恐れてか、しかし大杉は現れた。渋々ながらも溜藏の前に。以前と同じような灰色の雨が降る日。

溜藏はまず第一に右の疑問点について問い合わせた。単に忘れていただけならば素直にそう云つてくれれば良い、とも申し添え。果たし

て大杉は、一応予算は毎年の稟議の俎上に載せているものの、下水道の整備、道路工事、京都議定書の制定によって一段と厳しくなった排ガス規制への対策、育児支援事業、なかよしクラブの運営、区役所内の蛍光灯取替えなど、他に優先せざるを得ない各種予算項目が山とあり、それに加えて最近は郵便局の公社化などといった問題もあって、ポストの扱いに関する管理責任所掌が以前よりなんやかやとややこしくなつてしまい、まあそんなこんなで物事は中々思うように進まないのだ、などとあやふやな説明ばかりをする。対して溜藏は、「まあ全体として分かつたような分からんような説明だが、前半は何となく分かつた。要するに力ネが無いという事だな。それならそうとはつきり言え。よし、ならばポスト破壊並びに代替ポスト設置の為の費用を俺が負担しよう。それならいいだろ？・御承知のとおり、俺は今や大金持ちだ。多分。なので、そちらが要求するだけの額を出すから、それでもつてとつとこのポストをぶつ壊して俺を助け出してくれ」と大杉に改めて要求した。ところがこの大杉ときたら實に煮えきらぬ男であつて、いやいや、その気持ちは嬉しいのだけれど、そのような公共事業は例外なく必ず国家或いは自治体の予算でもつて行われねばならぬのであり、やはり特定の民間人からそういう事業費を特別に出させたとあっては区の収支が途端に不透明となつてしまい、それを下手にうやむやにしてしまうと場合によつては贈収賄、使途不明金、などとあらぬ疑いを世論から向けられてしまつ恐れも有るのであつて、或いはまあ「有志による寄付」といった建前とする事も考えられなくはないんだけど、それはそれで手続きが非常に煩雑且つ面倒であり、加えて、特にポストの破壊／代替ポスト設置となると恐らくは数百万単位にものぼる力ネが動く事となるであろうから、そうなると金額が金額だけに区としては力ネの出所たる溜藏を匿名扱いのままでおくわけにもいかず、衆目に対してその名を大々的に公表、かかるのちに感謝状を贈呈……といった運びとなろうと予想され、それはそれで別に結構な事じやん、などと云うかも知れないが、しかしそこには大い

なる陥穽というものがあつて、つまり、溜藏の職業は、いつ云つては失礼だが一般的には反社会的なイメージを有するところのパンクロッカーッちゅうやつである、それ故、溜藏から寄付を受けたとなると、たちまち区全体としてのイメージが悪化しちゃうかも知れないわ、といった不安が誠に遺憾ながらどうしても出てくるわけであり、そういうた懸念に対し、どこまでの職制の人間がどのような判断を下すか、というのは正直に言うと自分のレベルではとんと見当がつかぬ、などと一向に埒が明かぬ弁明を繰り返しては恬然としているのだった。

えい。もういい。やめだやめだ。人がせつかく「自分の救出に掛かる費用を自身で負担しよつ」などと百歩も千歩も譲つた案を提示してやつてはいるというのに、なにが区のイメージだ。なにがパンクのイメージだ。溜藏は、役職だけは立派なくせに斯かる瑣事ですら自分一人の判断でもつて全く決定出来ぬ大杉の区役所内に於ける極めて中途半端な立ち位置、といったものを俄かに垣間見たような気がして、なんとなく意識の片隅がうすら寒く凍るのを感じた。そして、そうした立ち位置は、後ろ向きな損得勘定にのみ長け、物事が上手く立ち行かぬ理由ばかりを常に自己弁護のために並べ立て、そのくせ、ではどのようにすれば上手く行くか?といった前向きな議論には参画する素振りすらもこれ見せず、それでいて他人を何かにつけて小馬鹿にして憚りない、といった外ならぬ大杉本人の非建設的な資質そのものが齎した結果であろうこと一目瞭然であつて、溜藏としては、これ以上なんら解決策を見出だせぬまま、この非建設的な男と非建設的な水掛論ばかりをいたずらに重ねる気分には到底なり得なかつたのである。

「**帰れ**」

溜藏が一言そう吐き捨てるも、大杉はさも残念、といった表情を作

つて見せた。

その残念は、溜藏を救えなくて残念、といった残念では勿論なく、自分が今しがた説明してやつた行政の世界のやんごとなき事情というものをどうににもこうにも理解して貰えず残念、これだから素人つてやつあ困る、やつぱり阿呆だこいつは、といった意味合いの残念に他ならなかつた。

さて、いつなるともはや行政に頼る事は出来ぬ。ここから脱出する方法を自分自身でなんとか勘考せねばならん。しかしどうやって、その方法といつものぞうにも思い浮かばない。

さつとてここに至つては、大杉が以前に提案したところの右腕切断、といった方法などは殺されても選びたくなかつた。なんとなれば、右腕が無くなつてしまつてこのもこれ實に不便な話には違ひなかつたし、それよりもなによりも、ここまで数年間、そういうた安直な路線を頑として選ばず、道行く人の蔑視に堪え、一躍有名になつてからは不特定多数より我が身一身に注がれるところの無遠慮な注目といったものに堪えなどしてきた艱難辛苦・・・それらが全て、そつする事によつてたちどころに否定されてしまつよう感覺せられたからである。最初から切断してりやよかつたんじやん、と。嫌だ。嫌嫌。そんなのいやん。いつなるともはや意地だ。

そういう考え方、しかし一向に妙案が浮かばぬ間も続く狂乱の日々。このところの溜藏にとつては、オンステージ、オフステージ共にもはや苦痛以外のなにものでもなくなつてしまつていた。

「……………」

そんなある夜、いつもと変わらぬ狂乱のライブが看板となつてから暫くの事、誰のものとも一向判別つかぬ衣服の破片、肉片、血液、脂、体毛、体液などが散乱するにまかせた処刑台のようなステージ上、一人へたばつていた溜藏のところへ、弛んだ二の腕を振るわせ、ぶるぶると走り寄つてくる中肉中背の女、千無香があつた。

千無香は溜藏をとりまく無数のグルーピーの中では比較的初期の内に参加した一人であつて、四国某県出身の四十四歳。関西の某外国语大学在学中にアルバイトをしていたスーパーでたまたまその鮮魚売り場に勤めていた学の無いしかも妻子持ちの取るに足らぬ中年男と不貞の仲となり、刃傷沙汰の末に半ば駆け落ちで略奪婚、大学を中退、田舎の両親とは当然の如く絶縁、その後もスーパー勤めを続けつつ結婚生活を続けるが、夫との関係にもやがては倦怠の陰が落ちるところとなり、二十年目の結婚記念日になつさりと離婚、同時にタイミングを図つたが如く新たに恋仲となつた二十歳年下の荷受バイトの男と同棲生活をスタート・・・するも、今度はほどなくして男の方が若気の至りで夢とやらを追いかけて上京、遠距離恋愛、そんなまだつこしい恋愛形態に我慢できぬのは千無香であつて、加えてやがて男からの連絡も途絶えがちとなり、三ヶ月後には居ても立つてもおれなくなつて自らも男を追っかけ上京、した先で、男が既に別の歳相応の女と入籍していた事実を遂に知るところとなり半狂乱、悪あがきとばかりにストーカーとなるが、最終的には官憲の介入を受けるに至つて断念、といったまあ基本的に出鱈目な女であり、その後しようがないもんだから条虫区で霊能力者をしているという知人の女宅に逗留。そこからある日、陶芸教室に通う道すがら、この夜の如くライブ後にぐつたりとなつていた溜藏を発見。ふらふら接近。そうしていやがる溜藏を無理繰り組み伏せて暴行陵辱。爾来、溜藏のグルーピーを続けているのであつた。

そのような経緯に加え、この女ときたら何かにつけて周囲の関心、同情でも買いたいのか、自分はこんな酷い目にあつた、自分には力ねがない、自分は病弱だ、自分は不惑症だ、誰も自分の事を分かつてくれない、昨日は体調が悪く夕食をもどした、陶芸では凡の才能を發揮することができない、痔になつた、などと事あるごとに我が身の不幸ばかりを周囲に喧伝しては憚らぬ悪癖があつて、その自意識過剰な根暗さ、独りよがりな被害者意識、といった性質は周囲の

人間を兎角イライラさせ、故に他のグルーピー連中はそんな千無香を軽蔑し、煙たがり、一定の距離を置きなどしていたのである。無論、その悪癖に関して辟易するところは溜藏とて同様であった。が、どういうわけかその一方で、他のグルーピー連中とは違つて、この女に対してだけは思つた事をなんでもかんでも歯に衣着せず話せてしまつような気安さをも溜藏は感じていて、それが何故なのかは一向に分からなかつたのであるけれど、とまれ、そういうつたわけで、溜藏はこの女を別段遠ざけたりはしなかつた。

「……」

「なんだ。またおめえかよ」

「……」

「なんだよ。氣色わりいな。相変わらず陰気な顔しやがつて。お前さ、脂肪吸引しろよ。脂肪吸引。脂肪がたまつてつから、そんな陰氣なんだよ。ああそうそう。酒飲むか？食いもんもあるぞ。そちらへんに転がつてるから、食つなら勝手に拾つて食えよ」

「……話がある……」

「だからなんなんだよ？言つとくが、今日は暗い話なんかすんじゃねえぞ。」ここんとこ俺も氣が滅入つて滅入つてしまつがねえんだからな

「……氣が滅入つてるの？」

「そうだよ。お前はいつも自分一人だけが不幸みたいな事を言つが、不幸なのはてめえだけじゃねえんだよ」

「……何がそんなに不幸なの？」

「つるせえな！いいかげんにしろよ！だつたらさ、お前の不幸は一体何なんだよ？いいか、俺はな、一人になりたいんだよ。一人にな

溜藏は例の氣安さに加え、半ばやけつぱちになつて口を滑らした。

「……一人になりたいの？」

「……そ、そりやあなりたいさ」

「……ちやーむがいやになつたの？」

ちやーむとは、千無香が自分の名前の読み、ちむか、を変形、「魅了する」という意味の英単語に引っ掛けで作り、自分自身で勝手に名乗つているところの渾名であった。無論、本人以外には誰一人として彼女をそんな渾名で呼んだりはしない。それに第一、誰も魅了なんかされていない。

「馬鹿な。お前の事なんか知るものか。そんなケチくさい問題じゃあねえよ。わかるだろう? くる日もくる日も俺は白痴みたいな観客どもの前でぐだらねえライブばかりやらされてんだ。今日なんかは俺、あんまり馬鹿馬鹿しいもんだから、途中から歌うのやめて差し入れの八朔を奴らに投げつけたりして遊んでたんだよ。そしたらお前、あの白痴どもときたらどうだ? それもパフォーマンスだと勘違いたのか、また例の如く興奮してステージに勝手に上がつてきやがつて、ダイブしたりオナニーしたりとやりたい放題だ。阿呆だぜ阿呆。もうあんな阿呆どもの相手は沢山だ。なのに、右腕がこんな事になつてるばっかりに逃げようにも逃げられねえんだぜ」

「……じゃ、右腕を切り落としたら?」

「だからそれはやだつて!」

「なんで?」

「そ……そりやあ、いろいろあるんだよつー」

「じゃあさ、幽体離脱は?」

「なんだそりや? 藪から棒に。とうとうおかしくなつたか?」

「……だつてさ、魂が身体から離れたらとりあえず魂は自由じやん。逃げようと思えば逃げられるじやん」

「くわつかつかつ。あほかお前は? ばかですかお前は? どつやつてやんだよそんなこと? 病院へ行け。病院へ」

「大丈夫よ、多分」

「しつけえな」

「だつて、ちやーむが今居候させて貰つてゐる友達つて、靈能力者だもん。前にも言つたと思つたゞ。靈能力者だつたら何とかなるよ、多分」

「馬鹿な」

「明日連れてきたげるわよ」

「…………」

「…………じゃあ、その代わりと聞つてはなんなんですが…………」

「なんだよ氣持ちわりい。なんだその全然似合つてねえもじもじな」

「…………て、ほしーの…………」

「ああ？聞こえねえよ。せつまつと言へ。こアマ」

「…………して、ほしーの…………こアマの前とおんなじ段取りで」

「…………え？何を？こアマの前とおんなじって…………あつーそれはつー

ダメ…………」

溜藏はたほじ間を置かずして千無香の「段取り」が意味するところに思い当たつたが、それでもワンテンポ遅かった。鈍い痛みが溜藏の側頭部に走り、ついで目の前が急速にブラックアウト、暗くなつた。千無香は隠し持つていた金属バットで溜藏をしばき上げ、失神させたのである。しきりに千無香はつぶつぶふとその無駄に分厚い唇を涎でぬらめかせ、それでもつて溜藏の器官を硬直せしめ、そうしてやおら溜藏に跨つた。なんとまあ、千無香は潜在的ネクロフィリアでもあって、こつした「段取り」でもつて行われる性交は、その本来の欲望を果し得ない代わりの謂わば代償行為とも言えるものであったのだ。以前に付き合つていていた男達、というのも果たしてこんな目に遭つていていたのだらうか？濃い緑色のアイシャドーが氣色悪い。中央に寄り気味の眼が憎々しく陰気だ。

「おほうつーおつおつおつーおつーた…………ため、溜溜溜溜！
たつた今、ちんぽが入つてこゐのでありますー」

溜藏は真つ暗な無意識の中でのりの中途半端な社交性を恥じ、そして「いつか殺してやる。」との女」と。

翌日、千無香は同居人の霊能力者、殴田山栗子を伴つて現れた。年の頃は二十一二三といったところか？予想外に若い。それもさることながら、その出で立ちはセンスは別として、そこいらを往来する一般女性のそれと大きく変わるものではなく、均整の良く取れた細身の身体はストーンウォッシュのスリムジーンズと「BLACK PUSSY」などと胸部あたりに微妙な内容の英字が書かれた微妙な趣味の真っ赤なチューリックとでもって包まれ、セミロングの髪にはふわりと柔らかくゆるいウェーブが掛けられていた。当然ながら、そこに霊能力者としての特異性は片鱗すらも窺い知られるものではない。もっとも霊能力者であるからといって、それと分かる風体をしておらねばならぬ、といった謂われはどこにもなかつたわけだが。

しかるに、それでは山栗子の風体はどうをとっても全く奇抜ではなかつたか？と言われば果たしてそうではなく、否、実のところ、先に申し上げた部分以外のただただ一点に於いて、さりげなく、しかし圧倒的なまでに奇抜というか異様な点が有つて、それは一体何か？と問われればつまり、山栗子の顔面に施されたるマークというか、むしろ模様とも言つべきか、が、真に珍妙、奇異というか、まあはつきり言つてしまえば非常に氣色悪く、もう少し具体的に言うなれば、太さ三ミリメートル程度の黒い真っ直ぐな縦線、これが顔面隈なくにびっしりと一ミリメートル程度の等間隔を空けて描かれている、という点であった。それは細かい格子縞模様、などと言つてしまえば可愛らしい。しかるに格子縞であろうとなにであろうと、未開の地の蛮族でもあるまいし、そのような模様を顔面に施す、と云つたこと自体がやはり此れ現代文明社会に於いては明々確々に異様、異質以外の何物でもないのであり、加えて、一寸離れたところから見れば、その顔は単純に真っ黒に塗り潰されたようにも見え、

例えば夕暮れ時、人気のない路地裏にて万一そのような真っ黒顔が対面から歩いてきた場合、それに遭遇する人はまず十中八九がぎやつ、などと飛び上がり驚き、そうして逃げ出すであろうに違いないと想像されるまでに不気味なものであったのだ。

それは溜藏とて例外ではなく、さすがにぎやつ、とは言わなかつたものの、そのあまりのインパクトにただただ圧倒された。

「あ、あ、あ、あの……その顔面」

「ああ、これ？ 気にしないで。一応霊能力者つう事で」

山栗子は事もなげに答える。

「……は……はあ、そう……あ、それでさ、その千無香が言つてたんだけど、幽体離脱なんての？ 出来るの？」

「簡単よそんなの」

单刀直入に核心の話題に入るも、山栗子の態度はなおも涼しい。

「幽体離脱したらどうなるの？」

「どうなるつて？」

「……いや、だから例えば、離脱した幽体はどういう状態になつて、どういう物の見方、感じ方をしたりするのか？ とかさ」

「幽体？ 幽体になつても物を見たりする事は出来るし、音を聞いたり、考えたりする事も普通の人間と大して変わらずに出来るわよ。残存意識つつうのがあるから」

「じゃあ、普通の人間と何も変わらないのか？」

「馬鹿ね。そんなわけないでしょ。靈魂には物理的な実体は無いのよ。だから、自分以外の物体に触れる事は出来なくなるし、それに自分の姿も他人から気付いて貰えなくなるわ。表に出てみれば分か

るわよ。通行人はみんな遠慮無しにずんずん突進してくるし、車も避けてくれなくなるから」

「なんだ。そりやあつまらんな」

「あら？ そつかしら？」

「だつてさ、それだつたら何も出来ねえじゃねえか。体が無かつた

ら」

「だつたら、まあエクトプラズムになるつてこつ手も有るけどね

「なんだそれ？」

エクトプラズム（Ectoplasm）とは、靈魂の姿を物質化、視覚化させたりする際に関与するとされる半物質、または、ある種のエネルギー状態のものを指し、靈魂が体外に出る場合、通常は煙のようすに希薄で、靈能力がないと見えない場合が多いものの、このエクトプラズムの形態を介せば高密度で視覚化がある程度可能となり、それは白い、または半透明のスライム状の半物質となって、そこにいる靈が利用し物質化したり、様々な現象を起こす事があると説明されているものである。

そして山栗子曰く、正にこのエクトプラズムの形態を以つてすれば物質化が可能故、これを上手く利用すれば、通常の幽体とは違つて他人からも認識され、また自分自身も人や物に触れたりする事が出来、すり抜けたりもせず、つまりその点に於いては、生体とさせて変わらぬ振る舞いが出来るらしいのであつた。

「とは言つても所詮はハリボテみたいなものだから、それでも普通の生体とまるつきり同じような日常生活が送れる、というわけではないわ」

続けて山栗子は言つ。

「なにせ内臓が機能しないわけだから、食べたり飲んだりはまず出来ないわね。必要ないし。それに・・・あなた好きそうだから敢えて先に言つとくけど、セックスも無理。仮に性的興奮を催したとしても海綿体がないし、それを充血させる血液もないから、ふふつ、はつきりいつて不能よ。精子を作る精巣もハリボテだしね。ま、要するに、生体が内臓を以つてするような所作は極端に制限される、と考えてもらつて差し支えないわ」

「それなら息も出来ないのか？声も出せないのか？」

「その真似事ぐらいなら出来るわよ。呼吸器なんてただのポンプだし。何？幽体になつてからも歌いたい、とでも？」

「いや。別に。なんとなく」

「あ、そろそろ、話は変わるけど、エクトプラズムの物質を維持していくための栄養補給は必要よ。栄養というか、成分。エクトプラズムの主だった構成成分はタンパク質。だから……そうね、例えば豆腐とかを一日に一回は全身に塗り込まないといけないわ。別に豆腐でなくても、タンパク質を含んだ食品であればなんでもいいんだけれど」

「それをやらなかつたら？」

「腐るわ」

「ひえ」

「一日でもサボつたりしたら、次の日には腐つた死体みたいな臭いがするよつになつてよ。だから、これだけは絶対にサボっちゃダメ」

「う～むむ……」

溜藏は唸つた。唸つてみたが、実のところ、そして悩むところもなかつた。

エクトプラズムとなるにあたつての制約には確かに何かと邪魔くさいものがある。けれども、ここに至つて漸く出揃つた脱出案をそれ

では、と消去法でもつて取捨選択するにつけ、エクトプラズム案を除いて選択肢は最早なんら残されていないかのように思われた。右腕切断などは先の通りもつてのほかであつたし、さりとて早まつてグルーpeeなどをもつとして郵便ポストを破壊でもさせようものならば、忽ち器物破損の首謀者として官憲に身柄を拘束されようとしたが）、そうなると残る手段は千無番が提案したるところの幽体離脱。が、仮にその手段を探つたとして、姿形のない、物にも触れられないような幽靈になつてしまつては、せいぜいがそこいらへんを遊弋、そぞろほつつき回り、気が向いたら女湯を覗くぐらいの事しか出来なくなつてしまつわけであつて、それはそれでのんびりしていく誠に結構な事かも知らんかったが、しかしそこは世知辛い現代日本人の事、そのような変化も娯楽も刺激も無い生活には恐らくはもの半日と待たずしに飽きてしまうであろう、と予想されたのだった。溜藏は当初、一人になつて、ぼんやりと出来る時間さえ持てれば良い、などと殊勝な事を考えていた。しかしこうなつては、半ば義務感にも似た欲が俄然出てくる。それが人情というものだ。休んでぼんやりするぐらいなら、どうせなら遊びたい。遊びにや損損。その点、エクトプラズムになれば一応は物理的な体を得られるわけであつて、ハリボテであろうとなんであろうと、とりあえず体一つさえあればパチンコぐらいは出来るだろう。セックスは出来ないにしてもナンパの一つだけ出来るだろう。テントを持ち出して再び裏山に籠ることも出来るだろう。

離脱決行は翌朝の午前六時とした。なんとなれば溜藏の周囲が閑散となるのはこの時間帯の一瞬を置いて他に全くなかつたからであり、これより少しくも早い時刻となれば、前夜のライブの狂騒的な余韻を引き摺つた観客の残党どもが溜藏の周囲で未だ騒ぎ立てていたし、逆にこれより遅い時刻となつて日が高くなると、今度はマスコミや各種マネージメント、プロモーション等等に従事する人間が自らの業務を他に先んじて遂行せんと溜藏のところに多く殺到してくるのが既に日々の慣わしとなつていたからである。

にも関わらず当日の朝、山栗子は約一時間半も遅刻してやつて来たのだった。その理由は単純明快。寝過ごしたのだという。ところがこの日に限つて、幸い、且つ不可解な事に、彼女が漸く現れたその時点に於いて、現場周辺には人っ子一人の姿をも認められなかつた。道路の向かいに不正に路駐をされた白い自家用車のボンネット上でついぞ先ほどまで三時間に渡り暗黒舞踊を披露、の後に突如口から青紫色の液体を吹き出してそのまま失神、爾来、ぴくりともせぬ浪人生風の青年一人を唯一の例外としては。

この日、山栗子の例の顔面格子縞は前日の黒色から緑色に変わつていた。縞一本一本の幅、及び間隔は、前日のそれよりもやや広くなつていて。それでも気色悪い事には何ら変わりはない。変わりないどころか、恰もその様は何らかの配合を間違つて培養されてしまつた人工西瓜のようにも見え、故に、より一段と気色悪く、しかし一方で滑稽にさえも見えたのだった。かてて加えて彼女はこの日、身の丈一尺程もあるう仏像を首からペンダントのようにしてぶら下げていた。

しかるに、溜藏にとつてみれば今、そのような山栗子の珍妙さなどに一々とかかずりあつてゐる場合ではない。只でさえ一時間半を既に浪費してしまつてゐるのだ。いつなんどき例のプロフェッショナリズムの仮面を被つた世にも俗悪なエゴイストどもが襲い掛かつてくるやとも知らぬ逼迫したこの状況下に於いて、脱走は遅滞無く、速やかに、秘めやかに、隠密裏に行われねばならぬ。いや、既に遅滞は生じてゐる。ならば、生じた遅滞は取り戻せないまでも、有耶無耶に葬り去つてしまふべし。そのような焦躁に突き動かされ、溜藏は遅れてきた山栗子に對して、あまり紳士的とは言えぬ態度でもつて作業の推進を促したのである。事がとりわけ事務的な手続き然と、無機質に進められる事を願いつつ。

「んもう、そんな焦らせないでよ。だいたいやつぱ朝六時集合つつのはねえ、キツイつすわ実際問題。起きねえつて。ぜつてえ。
無理無理」

「馬鹿つ。そういう事は六時に間に合つてから言えつ。ほらつ、なんでもいいから早く早く。人が来ちまつたらどうすんだ」「もう一、いいじやんかあー。別に人なんか来たつてえー」「いいから早くつ。早くしろこらつ」

山栗子は溜藏の火急の催促に氣分をやや害したものの、まあ自分が遅刻したのも紛れもない事実であつて、その負い目から、渋々ながらも大人しく作業を始める事としたのだった。

まず山栗子は力士の土俵入りの如く両の腕を左右方向へと拡げ、蟹股となつて腰を落とし脱力。そして前腕を真上に向けるようにして肘を直角に曲げ、その体勢を維持しつつも頭を前後、腹を左右にぐにゃぐにゃと振るい始めた。最初はゆっくり小さく。次第に速く大きく。次に、それは儀式の呪文なのであるうか？その動作に併せて「あなたの親子は私の親子、そこいらめつたにぼつぼらぼつぼらぼ

つつき歩き、帰った頃には家がない、出来レースには困った江古田「などと訳の分からぬ奇怪な文句に奇怪な節を付けた奇怪な歌が繰り返し歌われる段となつて、それとほぼタイミングを同じくして山栗子は溜藏の方へじりじりと歩み寄り始めたのである。右手にはつりぞ先ほどまで首に掛けられていた仏像。

その光景、つまり、仏像を握り締めた西瓜顔の女が頭と腹を振り振り奇怪な歌を歌いながらぼつぼらぼつぼらと口に向かって接近していくといつた光景、は見るからに終末的であり、目を背けたくなるまでに凄惨でもあつた。しかし溜藏は今にも逃げ出したくなるような衝動を必死に抑え もつとも逃げようにも逃げられなかつたわけだが わななき、括目して、これによく耐えたのである。ところがこの女、一体何を考えているのか？次の瞬間、左手で溜藏の首根っこを捕まえ、そして己が右手に掴んだ仏像の頭頂部を間髪入れず溜藏の頭頂部へと宛てがい、あううことか、それを溜藏の頭蓋に捩り込まんとするが如くぐりぐりとまじと激しい力でもつて押さえつけ始めたのだった。

「ぎやああああああ～！痛てててててて痛い痛い！な、なにすんだあ～いきなり！」

「何よ。このぐらに我慢しなさいよ。ぼつぼらぼつぼら」「だから何だよ！そのぼつぼらつてワケの分かんねえ歌はつ！？」
「あ、ごめん、無意識の内に口ずさんでた。うるさかつた？」「い、いや……別にそれはどうでもいいんだけど……いやつ、どうでもよくないんだけど……し、しかしそにしても……いてててててて！」

「ぱつぱらぱらりんグラビヤアイドル、セックスまみれて既得権、下劣な糞雌ファックインカーント！」

「痛い痛い痛い！だから痛いっちゅうの！」

山栗子は歌い続けながらも一時は中断していた頭と腹の振りを再開した。仏像を溜藏の頭頂に捩り込む力は益々強くなつた。山栗子の左腕はいつしか溜藏にヘッドロックを掛けついて、その腕は回り回つて溜藏の口をも塞ぎ、故に溜藏は窒息しそうになつた。

「ぱつぱら、ぱ……わはははははは…」

突如、歌から一転、大口を開けて笑い出す山栗子。その顔を見上げれば、口の右角から白い泡交じりの涎。多幸感を露とも隠さぬ腑抜けた表情。その恍惚をもたらしたものには何か？溜藏、ほんの一瞬痛みを忘れて呆然。

「せりつ…なにやつてんのつ…あんたも真似して笑いなさい…わははははは…」

「ぶぬぐぐぐ……だ、だから、何の意味があんだけそれに…？いでででで…」

「いいから…あんたは言つ通りにすればこ…のつ…どうやら説明したつて分からぬでしょ…う…わは」

「……わはわはわは……わはははは……」

「もつともつと阿呆みたいな顔でつ…笑い声もちゃんと真似してつ…真面目にやんなさいつ…わはははははははは…」

「わ…・・・・・ははははは…」

「わははははははは…」

「わはははははは…」

「わはははははは…」

やつして一休のぐらーの時間が経過しただろつか？いよいよもつて痛みと息苦しさと屈辱と馬鹿馬鹿しさとに耐えかね、いい加減に山栗子のヘッドロックから逃れようと決心しかけたその刹那、溜藏

は夢の中で階段を踏み外したかのような、何者かに脚を引っ張られてストンと落下するかのような感覚を味わったのだった。それは些か虚脱的な感覚でもあった。

さて、次の瞬間。

「お、お。お~お~お~お~お~お~お~お~お~お~」

恐らくそのシーンは、幼少の頃に読んだオカルト雑誌のヒートマニアも見た記憶があつたろう、第三者からすればそんな分かりやすいシーンに違いないんだろうな、などと溜藏はふと思つ。即ち、溜藏はこの時、郵便ポストに右腕を突っ込んで白由を剥き、失禁して垂涎しつつ「にぐつたり」としているもう一人の溜藏を見たのである。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお~」

溜藏は囁ひすも驚愕し、絶叫していた。その絶叫は自らの耳に響いた。しかし他人には聽こえているのか？ 次いで彼は離脱した自己の体を認めようと、「いくじへ」自然の成り行きで、己が幽体の両手を見ようと俯く……ところが、本来有るべきところに両手を形作るものには無かつた。両脚も無い。その代わり、雪の堆積の如き白い塊の片鱗が足元には見えるばかりである。これは何か？ しかるに自身の幽体を除いては、ありとあらゆる外界が離脱前と全く変わらずに認められる。人事不省に陥っている青年。その青年が暗黒舞踊でもつて踏み荒らした自家用車。そして己が抜け殻。つまり、視覚は有るのだ。

「まだあなたの体は人間の形をしてないわよ。離脱したばかりの初期状態だから、溶けた雪ダルマみたいな情けない格好になつてるわ。

ちょっと待つて。今、あなたの生体の形成データをそちらに転送するから」「

溜蔵の物言わぬ疑問を見透かしたかのように山栗子が説明し、そして右手の仏像を溜蔵のエクトプラズムにぶすりと突き刺した。・・・すると、それまで怠惰極まりない白一色の不定形を呈していたその幽体は、恰もそれが元々記憶していた本来の形状を取り戻すが如く、見る見る人間としての姿形、色彩を顕し始めたのである。そうして出来上がった完成形は、傍らで白由を剥いている生体と瓜二つ、溜蔵であった。

「どう?改めて、今の気分は?」

「・・・・・すげえ・・・・・視覚も聴覚も離脱する前と全く変わらない。触覚は・・・全くないな。全く感覚がない。嗅覚もなさそうだ。味覚も?こりや馴れるまでに時間が掛かりそうだな・・・それにしても、俺の声は聴こえているのか?」

「聴こえてるわよ。昨日言った通りよ。今のあなたは生体の形状をそつくりそのまま「ピーして形作られていて、呼吸器も声帯も生体のそれを一応は再現してあるの。だから、空気を吸い込んで吐き出し、それを音声、言語に変換するぐらいの事なら出来るわ。どうよ?ちょっととしたものでしょ?」

「確かに・・・いや、ちょっととしたどころか、大したものだ。しかしやけに体が軽いな。ふわふわとしている。人は死んだら十数グラム軽くなるというが、今の俺はさしづめその十数グラムといったところかな?」

「(名答)きつと風が吹いたら飛ばされてしまうわね。石か何かを錘代わりに服のポケットに入れておく方がいいかも・・・の前に、服を着るのが先かしら?」

「おつと。こりやあいかん。素つ裸じやあないか。先ずは服を買に行かなくちゃな」

溜藏の気分は俄に浮き足立つた。羞恥は快活さに覆い隠された。自由の実感は今や郷里に凱旋する戦勝国の兵士達のように闊達な足取りを響かせ、そうして溜藏の意識の隅々まで徐々に、徐々に染み渡りつつあつたのだ。

「ちょっと待つて。焦らないで。あなたの生体に『仮魂』を入れておくから」

「なんだそれ？」

「あなたが離れている間、抜け殻になった生体をこのまま放つたらかしにしておくわけにもいかないでしょう？　よいしょっと……これでいいわ。試しに近づいてみて」

「うわっ！」

溜藏の幽体が近づいた途端、溜藏の抜け殻は唐突にぶんぶんと両の腕を振り回し始めた。しかし右腕はその付け根部分からポストに突っ込んだままとなっている故、厳密に言えば、それは振り回らない。代わりに右肩周辺の一部分がうねうねと波立つ。白由を剥いたまま。これは思いがけず怖い。

「おわああああ！　びっくりした！」

「人や物が半径五十センチメートル以内に近づいたら反応するわ。まあ腕を振り回すだけだから、脅かすぐらいの効果しかないけど。でも、これだけ無いよりはずっとマシよ。あと、人から話し掛けられた時に自動的に返事する音声をワンフレーズだけ吹き込む事が出来るけど、どうする？」

「え。 そうなの？」

虚を突かれて溜藏は一瞬迷う。全く思いもかけず副賞の景品を選ぶ局面に立たされたようなごく軽い迷いである。さりとて留守電でも

あるまいし、たったのワンフレーズで斯かる特殊な事情、及びそれに対する己が見解、証明を全ての第三者に対して申し述べ、そうして理解を得られようなどとは到底考えられもせぬ。

「じゃ、しょうがねえ』はい、閣下。光栄であります『

「なによそれ？」

「まあまあ。いいじゃんか別に」

「……まあいいわ。じゃ、これ、携帯渡しとくわ。電話帳に私の携帯番号とメアドが入ってるから、何か有つたら連絡ちょうどだい。あと、くれぐれもタンパク質の補給だけは忘れないでよ」

「アフターフォローまでばっちりというわけか？」

「そうよ。その代わり離脱料金、生体への復帰料金に加えて離脱期間中の管理手数料も日割りできつちりと貰いますからね。精算は生体への復帰完了後でいいわ」

「なんだ、金取んのかよ？」

「当たり前よ。靈能力者だからって朝露を飲んで暮らしていくとでも思つてんの？寧ろこれは特殊技能職よ」

「そうか」

「そうよ」

「そりやそうだな」

「そりやそうよ」

溜藏は傍らの抜け殻をちらと見た。相も変わらず間抜けた面をしている。口を開け、よだれを垂らし、臼田を剥いている。いくら「仮魂」が入っているとはいえ、この有様では余りに心許ない。溜藏は後で貼紙でも貼つておこうと考えた。

「しばらぐ体を空けます。十日程で戻ると思います。多分。戻つたらまたライブ頑張ります。多分。なのであんまりこの体にベタベタ触らないようにして下さい。宜しく。かしこ

さて、数年ぶりに進める歩。やがて数年ぶりに切り替わる身の回りの景色。依然として浮き足立つた意識の中、久しぶりに見る裏通り以外の街並は自分にとつてどれほど新鮮、且つ輝かしく映る事であらうか？などと溜藏は柄にもなく思慮に欠けた期待を抱いていた。

ところが、大通りに一歩足を踏み出した途端、それは脆くも一瞬にして崩れ去つたのである。何一つ変わっていない。ただ一点、溜藏のせいで人口密度が極端に上がつた事を除いては。

溜藏にとつての談合町とは元々、無駄に雑然としていてそのくせ虚無、どこか人の心を殺伐とさせ、月並みな表現ながら「負のエネルギー」といつたものが中途半端な含有率でもつてそこに横溢してけつかりやがるどうしようもなくファックな街であった。そのくせ自分はそこから抜け出せず、長年に渡つて寄生虫のようにそこに棲みついている。つまりどうしようもないのは自分とて同様。そんなどうしようもなさは数年の空白を置いて尚、斯様な糸余曲折を経て尚、とどのつまりは溜藏を前にして何ら変わることなく健在のままであつたのだ。外からほんの一瞬覗いただけだが、屋台村には相も変わらず不法滞在と思しき外来人數人が屯しているようだつた。一角では異様に若作りの服装を纏い、頭髪には三つ編みを結い、そのためにかえつて不気味極まりない、といった装いの老婆が一人立ち、両手の数珠を振り回していた。洋服は最初に目に入った量販店ですぐさま手に入れた。官憲に見つかぬよう、物音を立てず、身を屈め、さささとゴキブリの如く量販店に飛び込み、たまたま最初に手に取つたスペースシャトルの絵を大胆にあしらつたティーシャツとオレンジ色の土方ズボンとしましまパンツのサイズが自分に合つことを確認するや、一も二もなくそれを購入した。自分の生体

から抜き取つた財布で。無論、店員はその素つ裸に目をまん丸くしたが、それに対しても溜藏は「残念な結果というのは常にわれわれアジア系人種の身の上に降りかかるものであつて、特にこの街では、そういうつた破鏡の破片がそこかしこに散逸しているのだ。気にするな」などと訳の分からぬ弁明をしては開き直つたのだった。

次いで足を向けたのは、郵便ポストに囚われとなる直前まで己が寝処としていた木造四畳半の貧乏古アパート。当時、溜藏は野垂れ死にアワビを失つてからというもの、カマボコ工場の夜勤バイトで毎夜魚肉を練り、日が昇ればその口銭でもつて目玉が飛び出るような安酒を人事不省になるまで呑んだくれ、意識が戻れば再び夜、カマボコ工場へと赴いて魚肉を練り、といった発展性の何一つない生活を繰り返し送つていた。このアパートは日中の不毛の現場であつた。しかるに、このアパートの住人ときたら誰も彼もが似たり寄つたりで、シャブ中、男娼、自称ファシスト、インチキ新興宗教を立ち上げようとして失敗ばかり続けていた元教諭、などといった選りすぐりのくだらない人間ばかりがそこには見事に吹き溜まつていたのである。溜藏は談合町と同様、このアパートのくだらなさを心底から憎んだ。このたび溜藏がアパートに足を向けたのは、そういつたくだらなさとの決別を自分の心の中に付けようとする、いわば宛てのない一種の悪あがきの行為であつて、決して自分の部屋に立ち戻る為ではない。

果たして木造一階建てのぼろアパートは有つた。さて、ここに辿り着くまで溜藏には全くその気はなかつたものの、やはり辿り着いてみれば、自分の部屋が今はどうなつてゐるか？若干の無邪気な好奇心が芽生えてくるのを溜藏はいくばくかの期待と共に感じたのだった。もしかしたら、とつこの昔に引き払われているのかも知れない。寧ろその可能性の方が高い。それはそれで別に構わぬ。否、そうあつて貰つたほうが有難い。そうであれば、憎らしい自分の過去の一

つが死んでくれていいという事になるのだ……そこで、溜藏はそのみすぼらしい建造物の中に足を踏み入れたのである。一階の西田が入る部屋の玄関前まで行くと、そこには下手な片仮名で「チャラんポラングエンチャマチャマ」などと縦書きに書かれた表札が掛けられていた。「ン」の字が三つとも鏡で写したように左右反対に書かれている。やはり、そこは既に自分の部屋ではなくなっていたのだ。別段、そのこと 자체は予想していたことであつて、どうとこうともでもない。

この時、溜藏が言ひよつもなく暗い怒りに見舞われたのは、むしろ全く別の事情からである。

耳を澄ますまでもなく、部屋の中からじねんと男女一組の談笑する声が聞こえてきたのだ。男の声は下手な日本語。女の声は流暢な日本語。やがてその談笑は女の「あんつ。あんつ。あんつ」という喘ぎ声に取つて替わられた。男の低い「おほ。おほ。おほーう」という呻き声に取つて替わられた。ただそれだけの事である。溜藏の怒りはひどく冷静であった。ああ、やつぱり俺は外来人が嫌いなんだな、と。溜藏はアパート向かいの怪しげな質屋に向かい、そこでひよつとこの面を購入、そして再びアパートに立ち戻つた。部屋の鍵は空いているようだつた。もつともそのアパートの部屋には、住人が後から自分で鍵を追設するかどうかは別として、鍵などは最初から付いていない。とまれ、溜藏は購入したばかりのひよつとこの面を被り、嘗ての自分の部屋に堂々と闖入。土足。途端に巻き上がる悲鳴。ひっくり返る全裸の男女。男はすっかり萎縮して「くにやり」とひん曲がつた情けない陰茎を放り出し、その場に尻餅を突き、わけのわからぬ言語でもつて溜藏に罵声らしきものを浴びせている。それを見るに見る見る消えてゆく冷静。咄嗟の時に母国語が口を突いて出てしまふ、というのは公平な心理学的視点をもつて考えれば全くもつて止むを得ない反応なのかも知らなかつたが、それであつても自

分に向かって自分の分からぬ言語でもつて矢継ぎ早に話し掛けられる、というのはやはりなんだかどうにも生理的に腹が立つ。ええい腹が立つ。くそ。そうだ。こいつらは、こんなシチュエーションでなくたつて平氣で訳の分からぬ言語を自分に向けて浴びせやがるのだった。そういう奴らだ。俺が郵便ポストに囚われていた時、この男も俺のところにやつてきたに違いない。やつてきて、俺の分からぬ言葉でもつて仲間内でさんざつぱら俺の悪口を言い合つては楽しんでいたに違いない。それが今やどうだ？ 今度はいい気になつて交接なんかしてけつかるのだ。くそ。くそ。くそ。溜藏は怒りを露にしつつ、同時に下半身をも露にした。特に意味はない。そして部屋の片隅に立て掛けられた突つ張り棒のようなもの、それを手に取つた。瞬間的に蒼褪める女の顔。ますます取り乱すチャマチャマ。すると溜藏は、その突つ張り棒を天井に向けて何度も何度も突き上げた。そうして、訳の分からぬ不気味な経文を唱え、腰を振り、機能せぬ陰嚢をぶらぶらさせ、そうして四畳半を大きく時計回りに、きつちり五周周回したのであつた。じつくりと。確實に。呪術的に。それが終わると突つ張り棒を男に投げつけるようにして返し、自分のズボンと下着を取り上げ、早々に部屋を出た。何もかも面白くねえ、と溜藏は感じる。見上げると、煤けた空。

このような経緯をもつてして溜藏が「旅に出よつ」などと考へるに至つたのは、些か万人並みながらも止むに止まれぬ選択であつたと言える。離脱した生体を残して遠く旅立つ、というのは確かに気掛かりな事ではあつたが、とはいへ、一方でこのまま談合町界隈をぶらぶらしていても先の一件の如きくだらぬ出来事に一々遭遇してはイライラするばかりであつて、面白い事などは何一つとして起こり得ないであろうとも思われたのだつた。映画でも観てみようかと思つたが、もとよりそんなものには興味がない。ならば誰かの「コンサートでも冷やかし半分に観てやろうか」と考へてもみた。が、そもそも溜藏は、「音楽」というものの自体にさしたる思い入れを持つてはおらず、正味のところ、自分自身がパンクをやつていたのも言つなれば事の成り行きに身を任せた結果に過ぎなかつたわけであつて、ましてやそこへきて他人の演奏なんぞを聴く為にわざわざどこやらへと足を運ぶ、などといった発想は元来、この逆説的なパンクロッカーの持ち合わせるところでは全くなかつたのである。更に身も蓋もない言い方をしてしまえば、溜藏は、身の回り近辺のいかなる人工的な物事に対しても基本的に全く興味を持つていなかつた。人間そのものに対しても然別。故にナンパなどする気にもならぬ。肉欲もないつてのに婦女子、というか他人のおしゃべりなんぞに付き合つていられるか。あほらしくもない。そこでチャマチャマの一件の後、くさくさした気分のままに一軒のパチンコ店に立ち寄つてみた。しかしそれも十分としないうちに飽きてしまつた。それをするのは実のところ生まれて始めてだつたわけだが、いざやってみると夥しい銀玉が遊戯盤の中を蚤風のようにぴょんぴょんぴょんぴょん無為に跳ね回つているばかりで、しかもそれらは全くと言つていいほど盤上のポケットには入らず、そんな有様を数分もハンドルを握りしめて口を開け開け眺めている自分ときたら、もしかしたらとんでもな

い間抜けなのではないか?との焦燥に心は千々に乱れ、そのせいでこれっぽっちも面白くないのだ。幽体離脱に際し、溜藏は形在る肉体を取得、それを使って娛樂を享受する、といった事に半ば義務感から拘泥したが、どうのつまり蓋を開けてみれば、そういうた類の愉悦には食指すら動かぬであろう事が天日の下にこうして明らかとなつたに過ぎぬ。嘗て籠つた裏山は、いつの間にか宅地開発の為に削り取られてしまつてゐる。これ以上、いじりで一体何をしろというのだ?

そこで溜藏は、山栗子の携帯に旅立ちを知らせるメールを打つておく事とした。

「明日、北へ旅立ちます。溜藏」

それに対する山栗子からの返事は全く思いも掛けぬものであつて、加えて些かポップに軽く、顔文字付きで、溜藏をその後数分間に渡つて当惑せしめるものであつた。

「まじ?じゃあ山栗子もついてつていい?顔文字」

翌朝の六時、帝都駅。

山栗子は約束の時刻に遅れるどころか、今度は三十分もの余裕を持つてやつてきた。調子のいい女である。先のメールの遣り取りに於いて溜藏が若干の当惑を覚えながらも彼女の同行を断らなかつた理由、というのはこうだ。つまり道中に於いて万が一自らの幽体に何らかの異変が生じた場合、その方面的知識に暗い自分であつては恐らくは為す術がない。その点、この霊能力者が近くに居れば然るべき処置を期待出来るかも知らず、そういつた「安心」たるや、一人旅の気安さを犠牲にしてもなお、大いに歓迎さるべきものであつた。己が幽体を得て未だ一昼夜。その信頼性はまだまだ溜藏にとつて、未知数のままであつたのだ。反面、この霊能力者に対するは、溜藏はその実績からも徐々に一定の信頼を置くところとなりつつあつた。

しかし気になる点というのは有るのであつて、それはやはり、溜藏と山栗子、二人が旅立つてしまつた後に残される生体の事である。その世話は全面的に千無香が引き受けるところとなつた。この役回りは、潜在的ネクロフィリアである千無香にとってみれば正に願つたり叶つたり、といつたところか？今に至つて溜藏の生体は、考えようによつては或る種の「死体」である。碧い月明かりに照らされる死体・・・それに喜々として跨がる千無香の姿・・・その光景は想像するに易く、その禍々しさは溜藏を俄かに暗澹とさせた。それでも、その死体を見も知らぬ不特定多数の為すがまま、路傍にぽつねんと晒しておくよりかは、ある程度事情を知つた人間 例えそれが千無香であつても に託しておいたほうが、まだ幾分かはマシと思われたのである。千無香がそれを本当の死体にしてしまわない限りは。万全のバックアップ体制とはとても言い難い。しか

し、やむをえない。

ときには、それにつけても驚嘆すべきは山栗子の美貌であつた。この朝、彼女は例のおどろおどろしい顔面メークをしてこなかつたのだ。しかし、その手付かずの素顔たるや、貴賤を超え、国境を超えて、そして時代をも軽々と超え、およそありとあらゆる人類の牡を狂わせるに余りあるであろう普遍的な美を兼ね備えては今や悠然と溜藏に微笑みかけるのだった。高貴なる輝きを湛えた一重瞼の真つ直ぐな瞳は、矛盾するようだが、ややもすれば虚ろささえも垣間見せる悩ましげな暗さを内に秘めた。そうした縁がかつたほの暗さたるや、ともすれば長い睫毛が瞳の輝きを悪戯っぽく遮り、それによつて時に生み出される光の加減によるものだったかも知らぬ。一方、瓜実顔の輪郭が描くたおやかな曲線は、誰しもがそこに触れてみたいと切実に望む優美極まりないものであつたけれど、それでいて計算され尽くした人工的なものでは決してなく、飽くまで自然の産物そのものである。そのくせ、それは人を本能的に惹きつけてやまない普遍的な不完全美、としか言ひようのない何かを兼ね備えていたのだ。寧ろ完璧さを求めるならば、彼女の高い鼻梁と細く形の整つた眉、そして、その柔らかさ故に口づける事すらも憚られるような厚くも薄くもない薄桃色のしつとりとした唇に目を向けるべきであろう。これらの造形一つ一つは恰も一切の妥協を許さぬ厳格な職人の手によつて作り上げられた伝統的工芸品のようであつて、緻密極まりない。さて、じつに完全な部品、不完全な部品が玉石混淆の様相を呈するままに山栗子の顔に集約せられ、えもいわれぬバランスでもつて配置されたる時、そうして、それが喜怒哀楽・・・・ありとあらゆる感情を体現した時、その美はもはや完全不完全を完璧に超越し、或いはクレオパトラのそれのように、一国の命運を左右しかねない迄の神懸かつた力を遂に持つに至るのであつた。

列車はこうした危うい美と死者（幽体と生体、その一つが備わつて

初めて完全な「生」であると考へるならば、今「」にいる溜藏は紛れもなく死者である！）とを載せ、静かに走り出す。

美、そして死。」の一つは図らずも共通の価値観の中に存在を誇示することが多いあつて、死の中に美は見出だされ、行き場を無くした死は時折、美に身を纏したりもある。」くたまに、流血した死体がこの上なく美しく映るのはこの為だ。斯かる耽美的な美と死のきらびやかさ……ボックス席に対面に座つたパンクロッカーと靈能力者は実のところ、図らずもこの点に於いて、「生命」に束縛される其れをはるかに凌駕した永遠の美を紡ぎ出しつつあつた。というのは嘘で、山栗子は列車に乗り込むや否や事前に購入していた帝都駅名物、合成縁蛸駅弁を喰らい始めたのであるが、そのやや小ぶりな縁蛸を口をすぼめてちゅるちゅると吸つようにして喰らひつさまは全くもつて正視に堪えぬ酷いものであつた。

「……お前さあ、そんないい女なのに、なんであんなわけ分かんねえマークしてんだよ？」

「ちゅるちゅる……うぐ……あら？ うれしい」と言つてくれるじやない？ そうね、あれはね、仕事の時だけよ。靈の奴らつてさ、ちょっとばかし自分が変わつた存在になると、結構いい氣になつて偉そうな態度を取つたりするのね。特に男が多いんだけど。アホよ。はつきり言つて。で、そういう奴らにナメられなにように先ずはあのマークで奴らをビビらすの。そしたらあいつら、大体は大人しくこつちの言つ事を聞くようになるわ。あいつらの自信なんて正味すつごく薄つぺらいんだから。身の程を弁えてりやいいのよ。死んだくせに」

「じゃ、俺、やつぱり靈魂としての自覚が足んねえのかなあ？」

「いいんじやねえ？ それぐらいの卑屈さが奴らにも欲しいわよ。仕事しにくいつたらありやしない。降靈の時なんか、自分を大物で見せたいのかワザと三十分も遅刻して降りてくる勘違い野郎もいるしね」

ここから話題は発展し、溜藏は山栗子の身の上を聞くに至った。そうして分かつた事は、幼少の時分より靈の姿が当たり前に見えていた彼女にとって、生身の人間も、靈も、根本的にはさほど大きく異なる存在ではない、という事である。実際、中空を彷徨う浮遊靈、電信柱の影に佇む地縛靈、死靈、生靈、惡靈、怨靈…… そういうものが他人に見えず、自分だけに見える、という特殊な事情に自身が気付いたのも随分と遅く、中学一年の時のとある出来事がきっかけであって、それまでは生きた人間と靈魂との区別すらもまともに付けられずにいたようだ。

それは夏休みが明けた一学期の初日の朝であった。その日、いつもと変わらず登校した山栗子は一学期と同じように二組の教室に入り、自分の席に着いた。そしてふと右隣の席を見ると、机の上には花瓶が置かれ、白百合が生けられている……にも関わらず、その席の主たるクラスメートの島子は一学期と何ら変わることなく、当たり前のようにそこに座っているのだった。生来の靈能力者は、島子と取り分け昵懃というわけでもなかつたものの、この一見風変わりな光景に思わず声を掛けた。

「島子さん。その机の上の花瓶、あんた邪魔じやないの？」

すると、島子はさも意外、といった表情を添え、こう答える。

「え？ 殿田さん、私が見えるの？」

「なに言つてんの? 当たり前じゃん。見えるに決まつてんだしぃ」

「アハ……靈感があるのね…… 私ね、昨日の夜ね、死んだのよ」

「ふうん。 なんで?」

「自殺したの……」

「ふうん」

「だからね、今の私は幽靈なのよ」

「じゃあ、死んだら幽靈つてのになるんだ。 でもなんで見えないの?」

「知らないわよ。 そういう事になつてゐる。 幽靈は見えないの。 だから他のみんなは私に気付いてないわ」

「アハ! いつもみんなんだ」

「本当に知らないの? テレビとかで時々やつてるのはじやない?」

「あ、ウチはアレよ。 アル中のオヤジが随分と昔に一階の窓からテレビを投げ捨てちゃつて、それつきりテレビは置いてないのよ。 はは。 無くともあんまり困らないし。 ビーチばり置つたつて、またオヤジが酔つ払つて投げ捨てるだらうじ」

「あ、 そつなの」

「アハ! ななのよ」

「そりなんだ」

「そりなのよ。で、葬式はどこでやるの？」

「さあ？」

……死人とのこうした奇妙な遭り取りを経て、山栗子は自身の特殊性に気付かされる運びとなつた。皮肉にも死者より教えられたのである。そのようにして漸く自覚した稀有な能力でさえ、当の本人にしてみれば、例えば手の指の第一関節だけを直角に屈し、その他の関節は曲げずにピンと直つ直ぐに伸ばしていられるだとか、舌を筒っぽのように丸める事が出来るだとか、そういった子供じみた他愛もない特技程度の意味をしか暫くは持たなかつたものの、それでも、玩具を無目的に振り回す幼児のような気紛れさでもつてその能力を弄ぶ内、靈魂は何時しか自然に見分けられるところとなつた。そればかりではない。死者の言う事を代弁したり、生者から一時的にその靈魂を引っこ抜いたり、といった如何にも靈能力者然とした所作（今や靈魂の形式を選別して引っこ抜く事すら可能であるのは先に見た通りである）をも後には可能としたのである。

抜け目の無い彼女は、そうした能力が極めて利益率の高い商売に結び付くであろう事を最初から見抜いていた。事実、学生時分には、それをほんのちょっとしたアルバイト感覚で「商業的に」行つた事もある。そのくせ、それを積極的に自身の職業と定めてしまうのには一方ならぬ抵抗があつて、それは何故かといつと、その職業の背後及び周囲には常に「陰気さ」が付き纏つようと思われたからであつた。その陰気なイメージは間違いなく「死」が一般的に与えるもので、言い換えれば、或る意味で生死の垣根を乗り越えられる山栗子のような能力を持たぬ我々にとって、死は陰気なものに外ならな

い。何故か？死は不幸であり、離別であり、無であり、恐怖であり、そして悪意を以つて見れば、禍々しい存在への変容でもあるからだ。一方で、山栗子にはこうした一般人の感覚が理解できない。滑稽にさえも感じる。例えば右に述べた「不幸」である。こういう事があった。山栗子はとある人づてで、初老の夫婦から「事故死した息子の声を聞きたい」との懇願を受けた。よくよく話を聞けば、三十過ぎにもなつて定職にも就かず、結婚もせず、ベーゴマをくるくると回しては遊んでばかりいた遊冶郎の息子である。しまいにはベーゴマを追つかけて通りに出、そこで四トンユニック車に跳ねられて死んだらしい。馬鹿か。そんな馬鹿息子などとは基本的に口も利きたくない。しかし頼まれているのでは仕方がない。息子の靈は意外にも近く、自宅の自室にいた。そこで山栗子はいつものように両親と息子の仲介をしようとした。ところがこの親不孝者、両親との会話など端からする気もないようで、死んでいても独楽を回す方法はないか？などと関係のない事ばかりを山栗子に聞いてくるのだ。これでは話にならない。しかるに息子が息子なら、両親も両親であった。彼らは、彼女がやむなくこの馬鹿の言う事をそのまま婉曲せずに伝えるや、若くして命を失った息子が可哀相だ、死んで独楽を回せなくなつた息子が可哀相だ、などと息子の不幸ばかりを嘆き、そうしてその場に泣き崩れたのである。

「死」というものが介在する、何故それだけの事で斯様に不幸となるのか！それでは生きている人間に降りかかる不幸は不幸と呼べぬのか！山栗子にとつて不幸とは、生者にも死者にも平等に訪れるものであつて、それら二種類の「人間」を単に隔てるだけの死そのものを不幸とする向きにはどうしても合点がゆかぬのだった。しかし大勢はそうではない。故に、生業として死を扱う者の背後には、常にこの不幸の裏書を持つた陰気さが憑いて回る。謂われもなき漠然とした観念、暗黙の了解・・・そういうものを取り分け嫌う彼女にしてみれば、そんな陰気さを社会より一方的に押し付けられる

のは真つ平御免であつて、それが為、成人した彼女は自身の能力を隠しつつ民間企業に五度勤めた。

いざれも続かなかつた。今度は、自分とは切つても切れぬ靈魂の存在が絶えず山栗子の邪魔をしたのだ。書類を作成しようと思えば、目の前に浮遊靈がふらふらする。上長に報告をしようとすれば、自殺した社員の靈が横から口を挟んでくる。これではまともに業務など出来よう筈もない。畢竟、こうして彼女は最初から約束されていたかの如く、自分にとつては憎き靈魂を扱う忌忌しい職業に他ならぬ靈能力者へと身を落とさざるを得なかつた由である。

さて、そんな山栗子の身の上を知る内、列車はいつしか野を過ぎ、大河を渡り、そうして日本海を目指す内に山岳地帯に入った。何ら宛てのないローカル線行である。元より溜蔵は、今回の旅の目的地を何処と定めてはいなかつたし、目的地を定める程の知識を有しているわけでもなかつた。生来、旅らしい旅をした記憶もなく、従つて、どこその何を求めて旅に出る、といったお仕着せのコースを選べるほどの見聞は最初から露程も持ち合わせてはいなかつたのだ。

それでは何故、旅に出ようなどと思い立つたか？ 実のところ、それは単に談合町が退屈だつたからだけではない。溜蔵の、その文字通りの魂が「ここにはない何か」を焦燥にも似た想いでもつて追い求めたからでもある。それは単純に「自然」であつたかも知れぬ。峻険なる山岳地帯、その合間を岩をも蹴立てて轟々と暴れ落ちる渓流、その鋭さは研ぎ澄まされた刃物のそれに似るが、それが下るに従つて徐々に緩やかさを纏い、漸く人々を辛うじて介入せしめるだけの広大な川の流れと化し、そうして遂には海へと還つてゆく・・・そういう大いなる自然を、今や超自然である我が身でもつて体感したかった。とは言え、とどのつまりはその「超自然」にして人間の勝手な思い上がりの域を出ないのは自明であつて、それは分かつた。しかし分かつていて、その事を敢えて彼の大自然より有無を言わさず突きつけられてみたい、などと溜蔵は切に願つた。ところが今や車窓より流れ入る初秋の渓谷が運ぶ涼風ときたら、そんな溜蔵の身構えにお構いなく穏やかで、拍子抜けする程に爽やかである。涼やかである。無論、その涼やかさが触感を有さぬ今の溜蔵に直接的に感じられる筈はなかつたものの、不思議と溜蔵はその涼感、ひいてはその背後に存する強大さをも「理解」した。即ち、大自然は人類の思い上がりなど意にも介さず、一個のじがない生靈

の身構えなど意にも介さず、その大いなる力をわざわざ見せ付けることもなく、そのくせ、ありとあらゆる事実を瞬時にその居住者に理解せしめたのだ！彼の対峙する相手は母なる太陽、僕たる月、そして他の太陽系惑星であつて、故に己が敷地に住み着いた羽虫などに一々構つてはおれぬ、といつた風である。

溜藏はこうした自然の威力に畏敬の念を抱き、それはそれとして、その自然の同時に併せ持つ豊穣さに目を向け、素直に享受する事としたのだった。嘗て裏山の紅葉に見ていた豊穣さを。何度かの乗換を経て、列車はやがて海辺へと出た。溜藏にとつては生涯初めての日本海である。その青の濃さに溜藏は目を見張つた。そういうする内に時はいつしか夕刻。どちらが言い出すとも無く、溜藏と山栗子は浜辺に程近い無人駅に降り立つた。

何と海の眩い事か！夕日が叩きつける無遠慮な光線を、海はそれ以上の無遠慮さでもつてそつとなく跳ね返し、そして行き場を失つた光は、とりとめもない玲瓏さを以つて、今や文明社会に対する抜本的な命題を投げ掛けるようである。溜藏がこの命題に対しして答えを出す義務を免れたのは、つまり溜藏が今現在、人間として完全の体を為していなかつたから、と考えるのは余りに御都合主義に過ぎるであろうか？とまれかくまれ、彼は何も考えず、浜辺に座り、金色の海の絨毯を眺めてみた。そういえば当初、溜藏が休みを取つた晩にやつてみたいと考えていた行為は、正にこのよつたものであつたのだ。

パンクロッカーはそつと目を閉じる。すると、残された感覚は忽ち聴覚だけとなる。こうして取り残された聴覚は、己がレーヴンデールを証明せんと慌てて波の音を取り込みに掛かる。しかるにその結果、取り込まずとも我先に耳に飛び込んできたのは果たして波音ではなく、右後方からの、決して情緒的とは言えぬ怒声であつた。

「なんだよ！人が折角黄昏よつとしていたのに」

あまりの事に振り返つてみると、山栗子は怒りの形相も露に周囲の中空を睨み回し、ぐわつ、ぬがつ、ぐおつ、などと獣じみた唸り声を挙げては手足をめつたやたらとばたつかせているのだった。聞けば、この浜辺の東向こうに自殺の名所とされる崖があるようで、そこで自殺した者の靈が崖下、山栗子に多数纏わりついてきているのだという。彼ら無念の亡者が生きている人間にふらふら近寄つてくるのは別段珍しい事でも何でもない、とは山栗子の言であったが、しかるに、ここで珍しいのは寧ろ山栗子の人間離れした美貌のほうであつて、死靈達はたまたま近寄つた女が絶世の美女と知るや、次から次へと仲間を呼び、今や大人數でもつて彼女を囲んでいるというのだ。その数はおよそ五十人。しかしどういうわけか、溜藏には同輩である筈の彼らの姿を見ることが出来ない。

「ぬ」「つーむがつーぐおつー！」

「お前さあ、靈能力者なんだろ？その靈能力で追つ払つたり出来ねえのかよ？」

「そんなの無理に決まつてんじやないつー！」

なぜ無理なのだろう？とまれ、こんな具合であつては、海原をのんびりと眺望しつつ悠久の時を楽しむなどしていられない。見ると、山栗子は見えない相手に向かつて棒切れを無茶苦茶に振り回していた。なんと見苦しい事だ。溜藏は大きく溜息を一つ。そして怒り心頭の山栗子を制し、海辺を辞した。

……旅はなおも続く。各停の列車は長閑に、ゆっくりと、しかし着実に進む。再び山間部に入ったところで、差し掛かった鉄橋の上から広大極まりない川幅の清流が俯瞰された。黄昏時の川面は薄紫

がかった鈍い輝きを発してゐる。それは一見、不思議な色合いで、あつて、この見かけによらずロマンチストであるパンクロッカーは、こつした思いもかけぬ色合いで時に織り成される黄昏時を、その予定調和の無さが故にこよなく愛したのである。薄紫の光沢の中には幾つかの小さな黒い影が落とされていた。それは清流の只中に浮かべられし釣人の舟だ。その舟形の影より伸びた一本の細長いしなやかな影は、遠からず訪れるであろう濁りきつた夜氣を振り払おうとするかの如く、ひゅんと音を鳴らして振るわれた。

一方、談合町にあつて主を失つた肉体、並びに、その肉体の右腕を飽きず咥え込んでいる郵便ポストの周囲には今や夥しい人だかりが出来ていた。

突如としてぴくりとも動かなくなつた溜藏。その体には、「しばらく体を空けます。十日程で戻ると思います。多分。戻つたらまたライブ頑張ります。多分。なのであんまりこの体にベタベタ触らないようにして下さい。宜しく。かしこ」などと胡散臭い貼紙が貼られている。死んでいるわけではないようで、それが証拠に、近寄ればぶんぶんと腕を振り回す。話し掛ければ「はい、閣下。光榮であります」などと答える。答えるが、何を話し掛けても「はい、閣下。光榮であります」としか答えない。

こんな中途半端な状態であつては、何らかの医療的措置を施すにしても二の足が踏まれようものだつた。加えて、この抜け殻の周囲では乾いたヘチマを両手に持つた千無香が始終休む事なく踊り回り、これがまたどうして目障りな事この上ない。さらに夜になれば、この女は溜藏のズボンをズる、と下ろして跨がろうとする。さすがにそればかりは周囲の手によつて阻止された。そうこうする内、千無香は四人に増えた。すると益々目障りになつた。

このようにして周囲はしばし騒然となつたのである。しかるに騒然となつたところで彼が目を覚ますものでもない。そこで、周囲が右の如く手を拱いている内、まあこいつ状態になつてしまつているのだから今更ジタバタしてもしようがない、ここは一つ、貼紙を信じて暫く待つてみるしかないだろう、との諦念にも倦怠にも似た気運がいつしか騒然さに取つて代わつて全体を支配するところとなつ

た。

しかしその油断がいけなかつた。

溜藏が文字通りの生きる屍となつて五日田の早朝、その屍が忽然と姿を消したのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6182c/>

爆撃淡路島

2010年10月13日18時13分発行